

夏の歌

巽ヒロヲ

序章
—夏の歌—

僕の母さんの実家は、海沿いの町である。
さすがに、村って言うほどではないけど、田舎だ。
近くに海水浴場があって、夏にはけっこう人で賑わう。
僕の思い出の中のその町は、常に夏だった。

砂浜。

磯辺。

海原。

青空。

太陽。

夕立。

神社。

縁日。

浴衣。

花火。

そして次の日——

強い日差しに照らされ、白っぽく見える、海岸沿いの道路。

そこで僕は立ち尽くし、泣いていた。

そんな、記憶がある。

たまに夢で見ってしまうほどに強く心に残っている記憶だ。

小学校に入学する、ちょっと前のことだったような気がする。

とにかく、僕は泣いていた。

そして、僕の周囲の大人たちは、何やら楽しそうに笑っていた。

めでたい祝いの場だったように思う。

そんな中、僕は、悲しくて、悲しくて、ひたすら泣いていた。

自分がなぜ泣いているのかも途中で分からなくなり、ただ惰性で泣き続ける。

そして——涙でにじんだ視界に、美保さんの顔が現れた。

美保さん——母さんの妹。僕の叔母。

その美保さんが、寂しそうな顔で、僕の顔を覗き込んでいる。

「ごめんね」

美保さんはそう言って、僕の頭を撫でてくれた。

柔らかな手の感触。かすかに汗の匂いが混じった香水の香り。優しい声。

今まで見たことのなかった、綺麗な服。

白無垢だった、と思う。

僕は、美保さんがお嫁に行くのが嫌で、もう会えなくなるのが寂しくて、それで泣いていたのだ。

僕は——まだ幼稚園児だったわけだけど、とにかく、美保さんが好きだったのだ。

それで、泣いていたのである。

そんな悲しい夏の日があつて、それからも年に一度はこの町に遊びに来て、海で泳いだり、虫を捕ったり、縁日に行ったりした。

あの日、もう会えなくなると勝手に思い込んでいた美保さんとも、あんなに大泣きしたのが嘘みたいに、普通に会って話をした。

もちろん、それはそうだった。美保さんがお嫁に行ったのは、そんなに遠く離れた場所ではなく、お盆には毎年実家に帰ってきてたのだから。

そして——いつしか、僕は、この町に来ることはなくなっていた。

そう、今年の夏までは……。

第一章
—夏の海—

「あっついな〜」

僕は、バスを降りて、思わず空を仰いだ。

青い空の中、太陽がキラキラ輝き、地平線の方には入道雲が浮かんでいる。

早めの電車に乗ったので、まだちょうど昼ごろだ。美保さんの家に荷物を置いてから海で泳ぐ時間は充分にある。

「久しぶりだな……」

五年ぶりくらいだろうか。

バス停から母さんの実家までの道は、ほとんど変わってないように見える。

僕は、着替えと洗面用具の入ったスポーツバッグを担ぎ直し、歩き始めた。

道は一本だ。迷うことはない。

小高い丘に沿うように緩くカーブした道を歩いていると、不意に視界が開け、砂浜と青い海が見下ろせた。

カラフルなビーチパラソルが無数に立てられ、それよりもさらに多数の水着の男女が歩いている。遠くの沖では、サーフィンを楽しんでいる人達もけっこう多い。

「海だなあ——」

僕は、褐色の混じった青緑から紺碧へとグラデーションになっている海原を見て、当たり前のことを言った。

海の圧倒的な存在感を前にして、かえってその感慨を表す言葉は単純になってしまう。

そして僕は、かすかに潮の匂いのする空気を胸一杯に吸い込んでから、美保さんの家へと道を急いだ。

「あ——」

塀も柵もない、道から直接続く感じの庭に入って、僕は思わず声を上げた。

記憶の中にあるとおりの、こぢんまりとした一軒家。

その、美保さんの家から、ちょうど女の子が出て来たところだったのだ。

学校の夏服らしい白いブラウスと紺色のスカートを身につけていて、髪の毛は背中に届くか届かないかって感じのセミロング。秀でた額と、大きなちょっと吊り気味の目に、見覚えがある。

その子は、家の前に置いてあった自転車を手で押し、道路に出ようとしたところで、僕に気付いたみたいだった。

「……どなたですか？」

丁寧な口調で、訊かれた。

小首をか上げた白い顔は、僕の顔と同じくらいの高さにある。

「えっと……智沙ちゃん？」

「そ、そうですけど……誰？」

名前を呼ばれたせいか、彼女の声に、警戒するような響きが混じる。

「僕だよ。研児だよ。従弟の小牧研児」

「……ああ、研児君！」

智沙ちゃんが、驚いたように目を見開く。

彼女の名は、朝倉智沙。僕の従姉にあたる。僕の母さんと、智沙ちゃんのお母さん、そして美保さんが、姉妹なのだ。

「懐かしいなあ。何年ぶりだろう？ そっか、智沙ちゃんはこの近くに住んでたんだっけ」

そう言いながら僕が近付くと、智沙ちゃんは——なんだか睨むような顔になった。

「あんまり馴れ馴れしくしないで」

「……え？」

「もう、智沙ちゃんなんて呼ばれるような年じゃないわ。それに、そもそも君、私より年下じゃない」

「え、えっと、智沙ちゃん、いくつだっけ？」

僕は、予想外の彼女の態度に戸惑いながらも、そう訊いていた。

「十四よ」

「じゃあ、僕と同じじゃん」

「で、でも、研児君は中二でしょ。私は中三だもの」

「……」

智沙ちゃんの言葉に、僕は、何も言い返せない。

びっくりしてしまったからだ。

彼女と最後に会ったのはもう五年以上前のことだ。そのころ、僕達は何の屈託もなく子犬のようにじゃれあって遊んでいたと思う。

なのに——

「君、チビね」

あろうことか、智沙ちゃんはそんなふうに来てきた。

「やっぱり、君みたいな子供っぽい人に、ちゃん付けで呼ばれたくないわ」

なんだか理不尽なことを言いながら、智沙ちゃんが、自転車にまたがる。くやしいけど、ほっそりとした彼女のしなやかなその動きは、なかなか様になっていた。

「じゃ、じゃあ、何て呼べばいいのさ」

僕の脇を擦り抜け、すでに自転車で道路に出かかっていた智沙ちゃんの背中に、僕は叫んだ。

「自分で考えなさいよ」

智沙ちゃんが、振り返りもせずになんか言い——そして、視界から消えた。

「……えーっと」

僕は、美保さんの家の庭に取り残され、指で頭をかいた。

まあ、これくらいのこと、僕が経験して来たことに比べれば、どうってことない。

それに、僕はよく知らないけど、僕と同じ年頃の女の子って、みんな、あんな感じなのかもしれないし。

気を取り直して、美保さんの家のチャイムを鳴らした。

ぴんぽーん、という音が、響く。

しばらくして、がちゃ、とドアが開いた。

「はあ〜い……。あつ、研ちゃん！」

むぎゆう〜。

「わっ、わぷっ……。！」

「よく来たねー、研ちゃん。大きくなったね〜♪」

あらゆる意味で智沙ちゃんとは正反対の態度でもって、美保さんが、僕の体を抱き寄せた。

顔が……。その……。美保さんのおっきな胸にうずもれてるんだけど……。

「あ、ごめんね。懐かしくて、つい……。苦しかった？」

「ぷは……。う、ううん、だいじょぶだよ」

僕は、ちよつとどもりながら答えた。

顔が、熱い。たぶん、真っ赤になってる。

「うふふふ、じゃあ、改めて、いらっしやい♪ さ、上がって上がって」

美保さんは、満面に笑みを浮かべながら、僕を促した。

顔の作りはもちろん大人のそれだけど、美保さんの表情や仕草には、何て言うか、若さというより、幼さみたいなものが残っている。母さんとは二つしか違わないはずだけど、とてもそうとは思えない。

そういうわけで、僕は、昔からずっと彼女のことを「叔母さん」というふうには意識できず、かといって二十歳近くも離れている女性を「姉さん」と呼ぶこともはばかれて、ずっと「美保さん」と呼んでいるわけである。

久しぶりに会った今も、美保さんは、無理に若作りしているという感じではない。Tシャツに洗いざらしのジーンズ、そして淡いピンク色のエプロンという格好は、とても自然だ。

そして、卵形の顔に、通った鼻筋、いつも笑ってるみたいな目、ぼってりとした唇——

僕が、初恋と言うにはあまりにも淡いあこがれの気持ちを抱いたころと、ぜんぜん変わってない。

なのに、美保さんがまとう雰囲気は、柔らかく、温かく、優しく——とても、大人っぽく思えた。

長く伸ばしている、ウェーブのかかった髪を、アップにまとめているからかもしれないけど……。でも、そんな単純なことじゃないような気もする。

「どうしたの？」

先に家に上がった美保さんが、突っ立ったままの僕に訊いてくる。

「あ、ううん。えっと、おじゃまします」

「いいのよ、そんなかしこまらなくても。自分の家だと思ってくつろいで。それに、この家には、今は

あたしの他に誰もいないんだし」

美保さんが、そう言ってにっこりと笑いかける。

僕は肯いて、美保さんに続いてこの歌浦の家に上がった。

歌浦というのは、もともとの美保さんの苗字だ。つまり、美保さんは旧姓に戻ったということになる。

美保さんは、昨年、離婚したのである。

別れた理由については、僕は知らない。ただ、この歌浦の家に住んでいた美保さんの両親——僕にとっては母方の祖父母——が相次いで病で亡くなったのをきっかけとしたように、そのすぐ後に美保さんは離婚した。

そして、それまで教師として勤めていた高校を辞め、空き家になったこの家に居を移したのだ。

祖父母が活着ている間は、僕は、毎年のようにこの家に遊びに来た。

そして、里帰りをしていた美保さんと会って話をするのが、何よりも楽しかった。

たまに顔を出す智沙ちゃんと一緒に遊んだり、海で泳いだり、みんなで連れだって縁日に行ったり、庭で花火をしたり……。

そんな、まるで魔法にかかったみたいに楽しかった日々を、僕は、四年近くも忘れかけていたわけだ。

今思えば、どうして、ここに来る気さえ無くしてしまったのかは、不思議なくらいだけど……。

でも、あの三年間を精算した今だからこそ、こんなことも思えるんだろう。

そして、僕は、今、美保さんと懐かしいちゃぶ台を挟んで、向かい合っている。

最後に会った時と違うことと言えば、祖父も、祖母も死んでしまって——二人きりだということだ。

「あ、ところで、智沙ちゃんには会った？」

「ん……うん」

美保さんがゆでてくれたそうめんをすすっていた僕は、曖昧に肯いた。

「どうしたの？」

「えっと、会ったことは会ったけど……何だか、前に会った時と違う感じだったな」

「そうねー。彼女、キレイになってたでしょう」

邪気の無い顔で笑いながら、美保さんが言う。

「……でも、あまり僕と話したくないみたいだったよ」

「あら、そう？」

美保さんは、細くて形のいいあごに白い指を当てて、ちょっと考え込んだ。そんな仕草が、女の子みみたいな表情に、妙に似合ってる。

「んー、智沙ちゃん、受験生だからねえ。今日も、あたしがお勉強見てあげてたのよ。って言っても、あたしが面倒見てあげることができるのは国語くらいだし、国語は何もしなくても百点取っちゃうよ

うな子なんだけどね」

「へえ……」

「研ちゃんのこと待って、一緒にお昼食べれば、って誘ったんだけど、このあと塾の夏期講習があるからって断られちゃったの。大変よね。わざわざ電車に乗って、ふだん通ってる学校より遠い塾に行くんだから」

「なるほど。だったら、あのピリピリした態度も、なんとなく分かるかな」

「そう？」

「うん。もし、僕のこと伯母さん——智沙ちゃんのお母さんから聞いてたら、余計アタマにくるだろうしね」

「——研ちゃん」

美保さんは、細いけどくっきりした眉を寄せ、僕を軽く睨んだ。

「自分のこと、あんまり引け目に思っちゃだめよ。いじけて考えるようなこと、何も無いんだからね」

「うん、分かってるよ」

僕は、笑顔を作って見せた。

「必要以上に自分を責めてもいいこと無いて、いろいろな人に教えてもらったし」

「そう……。研ちゃん、いい人たちと知り合ったみたいね」

美保さんが、笑顔に戻る。

「それに、とってもいい子になったみたい。もともといい子だったけど」

「や、やめてよお」

僕は、悲鳴みたいな声で言った。

自分が、いい子なんかじゃないことは——自分が一番よく分かってる。

「なんで？ 研ちゃんはいいい子よ」

でも、美保さんは、真っすぐな口調で、そう言ってくれた。

他の誰かが言ったなら、反射的に裏に込められた意味を勘ぐっちゃうんだけど——

僕は、とても素直な気持ちで、嬉しいと思った。

「研ちゃん」

そんな僕に、美保さんが言った。

「ちょっと食休みしたら、一緒に海に行こうね」

「ねえねえ、研ちゃん」

人でいっぱい砂浜でどうにか場所を見つけ、シートとパラソルの準備を終えた時、美保さんに後ろから声をかけられた。

「なに？」

振り返ると、美保さんが、ちょっと恥ずかしそうな顔をしていた。

「えーっと、日焼け止め、背中に塗ってくれるかな？」

「え……？ う、うん」

僕が返事をする、美保さんは、そのままそこで服を脱ぎ始めた。

美保さんは、家を出る前に、Tシャツとジーンズの下に水着を着ていたのだ。

それは、もちろん分かっていたんだけど……目の前で美保さんが肌をあらわにしていく様に、僕は、ドキドキと胸を高鳴らせてしまった。

黒い布地のビキニによって、白い肌が、余計に映えて見える。

「……やだ、あんまり見つめないで」

そう言いながら、美保さんは、なぜか両手でお腹の辺りを隠した。

たわわな胸が、両腕に挟まれ、よけいに強調される。

「えっとね、この年になると、胸よりお腹の方が恥ずかしいのよ」

美保さんが、言い訳するみたいに、そんなことを言う。

「そ、そうなの……？」

僕は、慌てて目を逸らしながら、言った。

「うん。若いころに比べると、太っちゃったし」

そう言って、美保さんが、てれくさそうに笑う。

けど、美保さんのウェストは、ちっとも出てなんかなくて、気にするようなことはないと思った。

「じゃあ、お願いね」

美保さんが、僕が敷いたシートの上に、うつ伏せになる。

僕は、持って来た荷物の中から日焼け止めの乳液を取り出し、手の平に垂らした。

そして、美保さんのかたわらに膝をつき、われながらおっかなびっくりな手つきで、その背中に触れる。

「きゃんっ」

美保さんが、高い声をあげた。

「もお～、くすぐらないでよオ」

笑いながら、美保さんが言う。

「ご、ごめんなさい……そういうつもりじゃなかったんだけど……」

どうも、指先で撫でるようにしたのがよくなかったらしい。

僕は、手の平で、美保さんの背中に乳液を塗り伸ばした。

なだらかな背中の、滑らかな肌の感触。

「ん、んっ……」

まだ、ちよっとくすぐったいのか、美保さんは何かをこらえるような声をあげた。

(そんな声を出されると……へんな気持ちになっちゃうよ……)

つい、美保さんのむにゅとつぶれた胸や、丸くて大きいお尻に、目が行ってしまう。

そして、ようやく、日焼け止めを塗り終わった。

「ありがとう、研ちゃん」

「どういたしまして」

そう答えながら、僕は、美保さんの笑顔を正面から見る事が出来なかった。

夕方まで泳いでから、美保さんと僕は、家に帰った。

東京とは比べ物にならないくらいセミの音が、夕暮れの空に響いている。

この一年間で、僕も、それなりに家事を覚えたのだが、やっぱり初日ということで、台所は美保さんに譲った。

晩ごはんは、美保さんは、トウモロコシをゆでてくれた。

それを食べながら、明日から、食事は交替で作ることに決めた。

「あたし、お料理ヘタだから、研ちゃんの腕前に期待しちゃうね」

美保さんが、冗談めかして言う。

「そんなあ。僕も、料理は始めたばかりだから」

僕は、まだ熱々のトウモロコシにかじりつきながら、言った。

見ると、美保さんは、トウモロコシの根元の方から、鮮やかな黄色い粒を一つ一つもいで、何粒かずつ、口に運んでいる。

そんな仕草にすら、女の人らしさみたいなものを、感じてしまう。

「あ、そうだ」

美保さんが、濡れたタオルで手を拭いてから、部屋の隅のビニール袋に手を伸ばした。

「昨日、駅前で借りてきたDVDがあるのよ。観ちゃわなくちゃ」

「え、何？」

「うーんと、エスエフ。研ちゃんも好きだと思うけど」

そう言って、美保さんが、DVDをプレイヤーにセットして、ボタンを操作する。

「あ、これ知ってる。『1』は観たよ」

テレビ画面の中で始まったのは、かなりブームを起こしたハリウッド映画の2作目だった。

「あれ、じゃあ、これは？」

「えーっと、そういえば、『2』と『3』は観てないや」

「じゃあ、一緒に観ましょ。分からないところが出てきたら教えてね」

そう言って、美保さんは、テレビを見やすいように、僕の隣に並んだ。

汗とお化粧のかすかな匂いが、鼻をくすぐる。

それに、この角度からだ、美保さんの豊かな胸の谷間が――

(な、何考えてるんだ、僕は……！)

僕は、内心の動揺を顔に出さないようにしながら、画面に集中した。

いかにも向こうのデザインって感じの、金属剥き出しのメカが、画面の中で動いている。

「この人たち、どうしてここにいるんだっけ？」

「えーっと、それは……」

美保さんの問いに、僕があやふやな記憶を掘り起こして、答える。

そうしているうちに、困ったことになった。

映画の主人公と恋人が——ベッドシーンを演じ始めたのである。

(あちゃあ……)

一人で観る分には、どうということのないシーンである。でも、僕の横には——体温が感じられるほど近くに、美保さんがいるのだ。

僕は、ちらりと、美保さんの横顔を盗み見た。

美保さんは、平気な顔だ。

確かに、美保さんから見れば、ぜんぜん大したことないシーンだろうし、僕のことを意識もしていないだろう。

けど、僕は……隣にいる美保さんを、意識せずにはいられない。

いけない、いけない、と思えば思うほど、僕の視線は美保さんの方に向いてしまう。

薄いTシャツの布地の下にある、まるやかな乳房の膨らみ……。

このままだと——ヤバイ。もう、僕のアレは、恥知らずにも固くなり始めてる。

「あ、あのさ」

「ん？」

突然声を出した僕に、美保さんがちょっと驚いたような顔を向ける。

「えーっと……僕、けっこう汗かいちゃったし、お風呂、入っちゃいたいんだけど……」

確かに僕は、今、不自然なくらい汗をかいている。

でも、はっきり言って、僕のこの申し出は唐突すぎたと思う。

「あら、そう？」

けど、美保さんは、何も気付いていない様子で言った。

「う、うん。だから、その、先にお風呂使っちゃっていいかな？」

「ええ、もちろん構わないわよ」

美保さんが、おっとりした声で答える。

「じゃあ、お先に」

僕は、ズボンの膨らみに気付かれないように立ち上がってから、部屋を後にした。

「うー……」

僕は、湯船に浸かったまま、小さくうなった。

みっともないことに、僕のアレは、風呂に入る前から、ずーっと立ちっぱなしなのである。

「まいったな……」

このままじゃ、出るに出られない。

僕が、この時期にパジャマの代わりに着ているのはTシャツと短パンだ。その格好では、どうしたって、股間のモノがどういう状態なのかモロバレになってしまう。

「普段は、こんなことないのに……」

そりゃまあ、こういう状態になるのは初めてじゃない。けど、ここまでずーっと立ちっぱなしというのは初めてだった。

原因は、分かっている。

海で、美保さんの背中に日焼け止めを塗った時の感触——それが、頭から離れないのだ。

美保さんは、僕のことを、男としては意識していないのだろう。

ただでさえ、たまに女の子に間違われるような僕だ。それに、僕はまだ、美保さんの半分ほどの年齢でしかない。

でも、僕は——美保さんのことを、強烈に、異性として意識してしまっている。

「美保さん……」

僕は、美保さんの背中に触れた手で——いきり立つペニスに触れてしまった。

「ん……」

びっくりするくらい甘い感覚が走り、思わず、声が漏れてしまう。

僕は、もう、我慢できなくなっていた。

ドアに背を向けるようにして、バスタブの縁に座り、ペニスを握る。

それは、自分でもはっとするくらいに固く、そして熱くなっていた。

(今だったら、美保さんも映画を観てるし……それに、このままでお風呂から上がるわけにもいかないし……)

僕は、自分自身に言い訳しながら、熱くなった肉棒を握る手を上下させ始めた。

「はっ……はっ……はっ……はふ……は、ああっ……」

こんなことするのは、けして初めてじゃないけど——でも、今までなかったくらいに、僕は興奮していた。

憧れの人と一緒に食事をしたすぐあとで、その人の家のお風呂でオナニーするなんて……。

(美保さん……美保さんっ……)

僕の妄想の中で、水着姿の美保さんが、あられもないポーズを取りながら、僕に視線を向ける。

昼間、本人をついじっくりと見てしまったせいか、僕が頭の中で描く美保さんのイメージは、おそろしく生々しい。

前に、ある人からチャットで聞いた「家族が多いからオナニーは風呂場でするんだ」という話に、「オカズはどうするんだろう？」なんて思ったものだけ——いざ自分がしてみると、快感は、こっちがうろたえるくらいに加速していった。

「あっ……み、美保さんっ……あ、ううっ……」

喘ぎ声の合間に、思わず、その名を呼んでしまう。

脳裏に焼き付いた、美保さんの綺麗な顔——しなやかな首——豊かな胸の谷間——くびれた腰——白い太腿——

そして、三角形の黒い布地の奥にある、その部分——

「あ、あうっ……あ……あくうっ……！」

禁忌の場所に意識を向けた瞬間、僕の中の何かが、急速に膨れ上がり——弾けた。

「あ、や、やば……んあああっ……！」

びゅっ！ びゆるっ！ びゆるる！ びゅ！ びゅうっ！

次々と迸る白い体液を、僕は、ペニスの先っぽを覆うようにして左手で受け止めた。

手の平に、射精の激しい勢いを感じる。

「あ、あああ……あ、あふう……」

僕が、これまで感じたことのなかったような快感の余韻に、息をついた時だった。

「……研ちゃん」

「ひゃっ！」

僕は、意外なほど近くから聞こえたその声に変な悲鳴をあげ——そして、その場に硬直してしまった。

浴槽に入って体を隠さなくてはという思いと、ペニスを精液まみれにしたまま浴槽に入るわけにはいかないという考えが、頭の中で真正面からぶつかって、僕の体をフリーズさせてしまったのだ。

「ごめんね、おどかして」

そう言いながら、気配が、背中に近付いてくる。

振り返るまでもない。今、僕の背後にいるのは美保さんだ。

「研ちゃん……」

「あ、あの、待って。ちょっと待ってっ！ 待ってよっ！」

この場をどう取り繕っていいか分からぬまま、美保さんの呼びかけに、必死で喚く。

と、信じられないことが、起こった。

バスタブの縁に座ったままの僕の背中に、むにゅん、と何か柔らかなものが押し付けられたのだ。

粗い布越しの、この、柔らかくて温かい感触は——

「ごめんね。あんなところ見せられたら、もう、あたし、待てないの」

かすれたような美保さんの声が、熱い吐息とともに、僕の右の耳をくすぐる。

ということは、やっぱり、今、僕の背中に密着してるのは、おそらくはタオルをまとっただけの美保さんの体で……。

股間で萎えかけていたモノが、急速に、勢いを取り戻していく。

「ね……あたしに、研ちゃんを誘惑させて」

そう言ってから、柔らかな唇が、ちゅっ、と僕の耳をついばんだ。

「っ……！」

驚き、さらに体を固くする僕の手の甲に、後ろから回された白い手が重ねられた。

「ねえ、研ちゃん……こっち向いて」

「で、でも……でも……」

僕は、精液まみれのままで再び勃起してしまったペニスを必死に両手で隠しながら、無意味にそ

の言葉を繰り返した。

「大丈夫……安心して。何も、恐いことないから……」

耳を舐めるような距離から、美保さんが囁く。

僕は、このままこうしていることがどうにも我慢できなくなって、ゆっくりと、体を後ろに向けた。

美保さんが、予想外に優しい顔で、にっこりと笑っている。

そして、その体は、バスタオルを一枚まとっているだけだった。

「……！」

さっきの自分の妄想よりもさらに衝撃的なその姿に、僕は、思わずうつむきそうになった。

「だめよ、研ちゃん。勇気出して、あたしのこと、しっかりと見て……」

ちょっと震えてるみたいな声でそう言われ、僕は、顔を上げた。

美保さんが、その白い体にまとっているバスタオルに、手をかける。

そして、はらりと——バスタオルが、浴室の床に落ちた。

少しも日焼けしていない白い肌と、朱鷺色の乳首。そして、黒々としたアンダーヘアが、僕の視界に飛び込んでくる。

「え、えっと……どうかな？」

美保さんが、一転して、恥ずかしそうな顔で、そんなふうに訊いた。

「——美保さんっ！」

僕は——声をあげて、美保さんに抱きついていった。

頭の中のヒューズが飛んで、とても自分で自分のことをコントロールできる状態じゃない。

「美保さん——美保さん——美保さん——美保さん——！」

ただ、その名前だけを繰り返して、強烈な衝動に突き動かされるまま、美保さんの裸体を乱暴に抱き締める。

「あ、ああんっ……研ちゃんてば……」

美保さんは、僕の背中を優しく撫でながら、言葉を続けた。

「大丈夫よ……あたしの方から誘ったんだもの……逃げたりなんか、しないわ」

そう言われて、初めて、美保さんを逃したくないという気持ちで、その体を捕まえようとしていたんだということに、気付く。

そして、僕は、大きな振り子が反対側に振れたような感じで、ものすごく恥ずかしくなった。

「あ、あの……僕……」

あれほど必死にしがみついていた美保さんから離れようと、ちょっと身をよじる。

けど、美保さんの優しい腕は、僕の体を捕まえたままだ。

「研ちゃん……キスしましょう……」

その言葉に何も返事をしていないうちに——美保さんの唇が、僕の唇に覆いかぶさった。

もちろん、初めてのキスだ。

柔らかくぽってりとした、不思議な感触……。

それを割って、ぬるりとしたものが、僕の唇に振れる。

美保さんの、舌だ。

「んっ、んんっ、ん……んちゅ……んふう……ん……」

美保さんの悩ましい鼻声に、脳がとろけそうになる。

ぬめぬめと動く舌に口の中をくすぐられて、立ってられないくらいに体から力が抜けていくのを、感じた。

にもかかわらず、ペニスだけは、ガチガチに固くなって、美保さんの下腹部を圧迫している。

と、美保さんは、僕のその部分を刺激するように、ゆるゆると体を動かした。

「んっ、うん……んふ……ちゅっ……ちゅむ……んふうん……」

キスの音に、甘いような喘ぎが混じる。

僕の胸に重なった美保さんの大きなおっぱいがむにむにと形を変え、乳首が、肌をこすっている。

「ちゅむ……んはあっ……ねえ、研ちゃん……」

キスを中断し、美保さんが、僕に呼びかけた。

その間も、僕のことを抱き締め、肌と肌を擦り合わせるように体をくねらせている。

二人の汗と、それ以外の何かが、僕のペニスをにちゅにちゅと濡らしていった。

「……研ちゃん……あたしのこと、好き？」

その小さな囁きは、まるで、怯えてるみたいに、かすかに震えていた。

「好き——好きだよっ！」

僕は、再び、体の奥底からわき出る強い情動に煽られるようにして、美保さんの体をきつく抱き締めた。

「好きだよ——好きだよ——！ 僕、僕、美保さんのことが——！」

腕の中の柔らかな体に訴えるように、言う。

そうしながら、僕は——自分で意識しないうちに、かくかくと腰を動かしていた。

これ以上はないというくらい勃起したペニスの裏側が、美保さんの下腹部をこすっている。

「あんっ……研ちゃん……」

美保さんは、いやがるどころか、僕の無意識の動きに応えるように、腰を突き出していた。

摩擦が、強まる。

「あっ、ああっ……！ み、美保さんっ！」

気が付くと、快感が、引き返せないところまで高まっていた。

頭の中が煮えてしまいそうな興奮を感じながら、腰の動きを速める。

「あ、ああ、あ、あっ……！」

ぶびゅびゅっ！ びゅるっ！ びゅっ！ びゅーっ！

僕と美保さんの体に挟まれたペニスが、大量のザーメンを発射した。

「あ、あああ、あ、あああ……」

まるで、体の中の力を根こそぎ発射してしまったかのような、感覚。

すうっと苦楽なる視界の中で——美保さんの体が、僕の精液にまみれている。

「ああん、すごい……熱いわ……」

美保さんの、うっとりしたような声が、どこか遠い。

「あ——」

僕は、まるで気絶するみたいに、力の抜けた体を、美保さんの胸に預けてしまった。

第二章
—夏の月—

「……！」

目が覚めた時、僕は少し混乱していた。

自分がどこにいるのか、分からなかったのだ。

独特の匂いが漂う、六畳の和室——

その部屋に置かれたベッドに、僕は、寝ていた。

和室にベッドというのは、ちょっとミスマッチだ。なんでも、この家に住んでいた祖母が、足を悪くして以来、このベッドに寝起きしていたらしい。

「……そっか、ここ、美保さんの家だ」

そんな、当たり前のことを口に出して確認してから、僕は体を起こした。

Tシャツと短パンを、僕は身につけていた。

「えっと……」

昨夜の記憶が、よみがえってきた。

僕は、お風呂場で、裸の美保さんに抱きついて、思い切り射精して——

そして、それから——

「研ちゃん、起きてる？」

「う、うんっ！」

部屋の外から美保さんに声をかけられ、僕は、必要以上に大きな声で返事をした。

「朝ごはんできてるから、食べちゃいましょう」

「うん……い、今行くよ」

そう言ってから、自分が、右手を無意識のうちに左の胸に重ねていることに気付いた。

激しい動悸を感じながら、昨夜のことを、さらに思い出す。

僕は、美保さんの体に、たっぷりと射精してから——もう、何もできなくなるくらいにぐったりして、そのまま眠ってしまったのだ。

美保さんに、服を着るのを手伝ってもらったような覚えがある。

恥ずかしい。

顔から火が出るってこのことか、と思うくらい、首から上が熱くなる。

「あれって……夢、だったのかな……」

あまりにも激しい記憶に、僕は、思わずつぶやいた。

起きぬけで、夢と現実がごっちゃになるのはよくあることだ。

だけど、ベッドの上でいくら深呼吸をしても、お風呂場での光景は頭の中で鮮烈になるばかりだった。

射精直後の、こめかみを内側から叩いていた血流の感触まで、よみがえってくる。

「どんな顔して、美保さんに会えばいいんだろ……」

そんなことを考えながら、ベッドから降りる。

僕の股間のモノは、持ち主の悩みなど知らぬげに、元気よく朝立ちしていた。

拍子抜けしたことに——美保さんは、まったく普通の様子だった。

いつもの、人を安心させるような笑みを浮かべたままの美保さん。

そんな美保さんと向かい合わせで食べる、ご飯とおみそ汁と卵焼きの朝ごはん。

「卵焼き、甘かったかな？」

「え？ そ、そんなこと、ないけど」

はっきり言って、ごはんの味なんて分からなかった。

普段通りの美保さんに対し、僕はいかにもおどおどしていたと思う。

でも、美保さんは、そんな僕を不審がる様子もなく、いろいろと他愛ない話をしながら、箸を進めている。

僕は、混乱していた。

やっぱり、あのおふろ場での出来事は、夢か何かだったんじゃないかと思う。

だけど、美保さんの肌の感触は、今も手の平に残っている。

そして、あの、激しすぎる射精の感覚も——

「あ、あのさ」

僕は、無意識のうちに左手の腕時計をいじりながら、言った。

「なあに？」

可愛らしい湯飲みでお茶を飲んでいて美保さんが、小首をかしげる。

「えと……あのう……ご、ごめん、なんでもない……」

僕は、何を言っているかわからず、自分の使った食器を重ねて、居間から逃げるようにして、それを流しに運んだ。

「研ちゃん」

そんな僕の背中に、美保さんが声をかける。

「な、なに？」

「学校から、課題出てるんでしょ？ 涼しいうちに片付けた方がいいわよ」

「そ、そうだね……」

「分からないところがあったら、あたしが教えてあげるから」

そんな美保さんの言葉に、僕は、振り返ることもせず、ただ、あいまいに肯いた。

そういうわけで、僕は、午前中には学校の課題をぼんやりと眺め、そして、午後には美保さんの自転車を借りて公立図書館に行った。

美保さんの名前の書かれたカードで本を借りるのが、なんだか、ちょっとだけ恥ずかしいような、くすぐったいような気分だった。

その後、美保さんの家の中で、ずっと好きな作家の小説を読んでいたんだけど——ぜんぜん頭に入らなかった。

美保さんは、午後から、近所の小さな会社に、事務の手伝いに行っている。

生計を立てるため、というわけじゃなくて、何か仕事をしていないと落ち着かないからだ、という話だ。

生活費の方は、両親——僕にとっては祖父母——の遺産と、あと、離婚した時の慰謝料で、どうにかしている、という話を、小耳に挟んだことがある。

つまり、美保さんが離婚したのは、美保さん自身に何か落ち度があった訳じゃない、ってことだ。「そりゃ、そうだよな……」

部屋に寝転び、枕元に文庫本の小説を置きながら、僕は思わずつぶやいていた。

美保さんは、たぶん、いい奥さんだったと思う。

なのに、どうして——美保さんは、離婚してしまったんだろう。

「……」

詮索しても、しょうがない。美保さんを嫌な気分させるだけだ。

僕は、この疑問を胸の中にしまっておくことに決めて、再び、ラミネート加工された文庫本を開いた。

夕飯のころには、僕も少しは落ち着いていた。

カレーを作ってみた。

カレーをまずく作るのはとても難しい、という話を聞いたことがあるけど、ほぼ一年前、僕が初めてカレーを作った時はさんざんな出来だった。

何かの本で読んで、隠し味にインスタントコーヒーを入れたのがいけなかったらしい。肉がナベに焦げ付いたこともあいまって、とにかく、辛いよりも苦いという不思議な代物になってしまったのである。

そんなわけで、美保さんが僕のカレーを一口食べて顔をほころばせた時は、すごくほっとした。

「おいしい♪ すっごくおいしいよ、研ちゃん」

「そ、そうかな」

ごくごく普通のカレーを手放しでほめられて、僕はくすぐったいような気分になった。

「うん。それにね、一人で暮らしていると、あんまりカレーって作らないのよね」

「ああ、量を作り過ぎちゃうから」

「そうなの。本当は、おっきなナベでたくさん作るのが一番おいしいんだって言うけどね」

「あ、それ、聞いたことあるよ」

そんな会話を交わしながら、自分の作ったカレーを口に運ぶ。

味の分からなかった朝食や、一人で食べた昼食より、はるかに美味しいのは、確かだ。

そして、僕達は、カレーを平らげた。

「あ〜ん、おいしくて食べ過ぎちゃった」

太っちゃうわ、と、小さく口の中でつぶやきながら、美保さんが食器を後片付けする。ゆうべ、夕食は作ってもらった方が洗い物をする、ということも、二人で決めたのだ。

僕は、自分の使ったお皿とかを流しに運んで、そして、縁側に腰掛けた。

ちょうどよく吹いてきた風が、風鈴を鳴らす。

その音を聞くだけで涼しくなるほど、僕は風流じゃないけど——でも、澄んだ音は耳に心地よかった。

背中で流しの水の音を聞きながら、夜空を仰ぐ。

月が、雲を照らしていた。

それをぼんやりと見ているうちに、忘れかけていたもやもやとした感覚がよみがえる。

本なんかで、よく、月のことを“なまめかしい”と表現することがあるけど——そのことに、初めて、納得がいった気がした。

確かに、柔らかな月の光は、人を変な気持ちにさせる。

いや、変な気持ちで月を見てるから、こんなことを考えるんだろうか。

いつの間にか、水の音が止んでいた。

「……」

無言で、美保さんが、僕の隣に腰掛けてきた。

美保さんは、今日も、ジーンズにTシャツという普段着姿で、髪をアップにまとめている。

目を横に向ければ、綺麗な横顔と、まるやかに膨らんだ胸元が、どうしても目に入るだろう。

それを恐れていると言うより、なんだかもったいないような気がして、夜空に目を向け続ける。

美保さんも、そうしているのだろう。

お互い、無言で、縁側に並んで、月を見る。

月光に照らされた暗い灰色の雲の動きが、速い。台風が近付いているという話だ。

それでも——当たり前だけど、月は、ただ静かに空の一点に留まり、流れる雲を照らし続けている。

「ね、研ちゃん……」

美保さんの声が、僕の耳をくすぐった。

「どうして昨夜のこと、何も言わないの？」

その言葉に、どきん、と心臓が跳ねる。

顔が熱くなっているのが、自分でも、分かった。

「夢だと思ってるわけじゃ、ないでしょ？」

「……」

何か言わなくちゃ、と思うけど、何も言えなかった。

情けない。

しょうがないから、僕は、精一杯の努力をして、こくん——と、肯いた。

「よかった……。もし、ゆうべのこと、よく覚えてないなんて言われたら、どうしようかと思っちゃったわ」

どこか晴れやかな、美保さんの声。

その声の調子に誘われるように、僕は、ようやく美保さんの方を向いた。

美保さんが、その顔に、穏やかな笑みを浮かべている。

そんな美保さんに、お礼とか、想いの告白とか、いろいろと言わなくちゃいけないと思ったんだけど……僕は、無様に唇を震わせるだけだ。

「こういう時はね、別に、無理して何かを言わなくていいのよ……」

お見通し、といった感じで、美保さんが言う。

そして、美保さんは、ゆっくりと僕に顔を近付けてきた。

ちゅ……と触れる、唇と唇。

そうなることに、期待というより、予感があった。

だから、僕は、心臓をどきつかせてはいたけど、もうパニックになることもなく、美保さんのキスを受け止めることができた。

ごちなく美保さんの肩に手を置いて、キスを続ける。

「ん……んっ……ん……」

かすかに漏れる美保さんの声に、僕は、全身の血液の温度が上昇するような気持ちがあった。

ふーっ、ふーっ、と鼻で息をしながら、美保さんの唇を感じ続ける。

美保さんの口が僕の唇をついばみ、それを真似るように、僕も美保さんの唇を吸った。

柔らかく、痺れるような感触——

そして、ようやく、僕達は唇を離した。

「んふっ……続きは、研ちゃんのお部屋でしましょう」

美保さんが、さっきと微妙に違う——どこか悪戯っぽい笑みを浮かべて、そう言った。

「んっ、んちゅっ、ん、んんっ……」

「ちゅ、ちゅむ、ちゅっ、ちゅうっ……」

僕と美保さんは、ベッドの上で膝立ちになり、互いの唇を吸い合った。

すでに、僕はトランクス一枚の姿になり、美保さんも、上品な白の下着だけの格好になっている。

トランクスの下で、ペニスが、痛いくらいに勃起していた。

「ぷは……ふふ、研ちゃんのここ、とっても元気……」

「あっ……！」

はっきりと TENT を張った股間のものをそっと撫でられ、僕は、声をあげてしまった。

「ね……あたしに、研ちゃんのここ、直接見せてくれるかな？」

「う、うん……」

僕は、肯いて、トランクスを下ろした。

「すごいわ……」

ため息みたいな声で、美保さんが言う。

「おっきいね、研ちゃんのコレ……」

「そ、そう、かな？」

「うん。とっても立派よ」

そう言って、美保さんが、その白い指で僕のペニスを優しく握る。

びくんっ、とペニスがひとりでにしゃくりあげた。

「あ……」

先っぽから少し液が出て、美保さんの手を汚してしまう。

でも、美保さんは、そんなこと全然気にしてないみたいだった。

「ふふ……どうしてこんなになっちゃったの？ 研ちゃん……」

「それは……」

僕は、下着姿の美保さんの体を、見つめた。

一度、お風呂場でハダカまで見てしまったわけだけど……ナツメ球のオレンジ色の光に照らされたその姿は、すごくエッチに思えた。

「あたしのことを見て、こんなふうにかたくしちゃったのね？」

「ごめんなさい……」

「謝ることなんてないわ。あたし、すごく嬉しいんだもん」

そう言って、美保さんは、右手で僕のペニスを握ったまま、左手で僕を抱き寄せた。

「ああ……」

思わず声を漏らしながら、美保さんのふくよかな胸の膨らみに、顔を埋めてしまう。

その柔らかな感触と、甘いような匂いに、僕は陶然となった。

自分でも意識しないうちに、顔を美保さんの乳房に押し付け、滑らかな肌に唇を這わせてしまう。

「あ……んふん……はあっ……」

美保さんが、喘ぐような声をあげる。

「美保さん……僕、美保さんの胸、見たい……」

僕の言い方は、なんだか、甘えるような感じになっていたかもしれない。

「うん……いいわよ……」

そう言って、美保さんは、僕から手を放し、手を背中に回してブラのホックを外した。

ぷるん、と美保さんの二つのオツパイが揺れ、そして、ブラがシーツの上に落ちる。

「すごい……」

僕は、そんなことを言いながら、美保さんの了承も取らずに、あらわになった右の乳首に吸い付いていた。

「あっ……け、研ちゃん……」

美保さんの体に腕を回し、ちゅうちゅうと乳首を吸う。

「あっ……！」

ぎくん、と美保さんの体が固くなった。

「あっ、ご、ごめんなさい……痛かった？」

「う、ううん、いいの……ねえ、研ちゃん……今みたいに、して」

「え？」

「だ、だから……あのね……オツパイ、吸って……」

「うん……」

どうやら、それを美保さんも望んでいるらしいということに勇気付けられて、僕は再び美保さんの乳首を口に含んだ。

さすがに歯が当たると痛いだらうと思い、注意しながら、口の中の乳首を吸う。

「あっ、あうん……ああ……はああ……」

美保さんは、どこか満足げな声を漏らしながら、僕の頭を自分の胸に押しつけさえた。

犬のように息が荒げながら、僕は、貪るように美保さんの左右の乳首を交互に貪った。

「あん、ああん、そう、そうよ……あうっ……うん、も、もっと、して……」

美保さんの甘い声が、僕の頭の中を熱くさせる。

いつしか、口に含む乳首の様子が、変わっていた。

舌と唇に当たる感触が、固くなっている。

(女の人も感じると勃起するとは聞いてたけど……こういうことなんだ……)

僕の行為によって、美保さんの体に変化が現れてる。

それが、これまで感じたことのなかったような嬉しさを、僕にもたらした。

「美保さん……美保さん……！」

ほとんど無意識にその名前を繰り返しながら、勃起して小指の先くらいになった美保さんの乳首を吸い、そして、舌で舐めしゃぶる。

「あっ、くうん……もう、舐めたりして……悪い子ね」

美保さんが、そんなことを言う。

「え、えっと……駄目だった……？」

吸うのはよくても舐めるのはいけないという理屈が分からないまま、つい、訊いてしまう。

「だって……そんなにされると、エッチな気持ちになっちゃうわ……」

そういう美保さんの声は、まるで、僕のことを誘ってるみたいだった。

だから、僕は、ぴちゃぴちゃと音をたてながら美保さんの乳首を舐めることを、再開した。

「あ、う、ううん……もう、研ちゃんてば……あっ、ああっ、あん……」

美保さんの喘ぎに励まされるような気持ちで、夢中で乳首を吸い、乳房全体に舌を這わせる。
そして、僕は、左手を美保さんの背中に回した状態で、右手を前に回した。
美保さんの左の乳房を、右手でこねるようにする。

「うんっ……」

ひくん、と美保さんの体が震えた。

(やっぱり、オツパイ揉むと、きもちいいのかな……)

熱い興奮だけでなく、奇妙な好奇心にも促されて、美保さんの柔らかな乳房をむにむにと揉む。

「あっ、ああんっ……だ、だめえ……だめえん……ああああ……」

くねくねと、美保さんの体がうねる。

でも、それが、僕のしていることに抗っているわけではない、ということは、はっきりと分かった。

「んんっ、んふうっ……もう、反撃しちゃうんだから……！」

きゅっ。

美保さんが、また、僕のペニスを握る。

「んふふっ……研ちゃんのオチンチン、ぬるぬる……」

「あっ、ああっ、あっ……！」

美保さんが、僕のペニスを、ゆるゆるとしごきだした。

美保さんがあからさまな言葉を口にしたことの衝撃と、腰の辺りに広がる快感が相まって、背中がゾクゾクとする。

「ああっ、すごいわ……どんどんおっきくなる……それに、とっても固い……」

「そ、そんな……美保さん……ああっ……」

憧れの人が、僕のオチンチンをしこしこ扱きながら、その状態のことを上ずった声で言っている。

今までした最も放埒な妄想よりもさらに淫らな展開に、僕の脳みそは沸騰寸前だ。

「はあ、はあ、はあ……研ちゃん、あたし、もうガマンできなくなっちゃった……」

するっ、と美保さんの体が、僕から離れた。

そして、ころん、とシーツの上で仰向けになり、綺麗な脚を天井に向けるような格好で、するりとショーツを脱ぐ。

「み、美保、さん……？」

僕は、自分の許容量を超えた事態に、どうしていいか分からなかった。

「研ちゃん、セックス、したことある？」

仰向けになり、下腹部のヘアの生えてる辺りを両手で隠しながら、美保さんが訊く。

「そんな……ないよ……」

「やり方は、知ってる？」

「え、えっと……」

「研ちゃんの、おっきくなったオチンチンをね……ここに、入れるのよ」

そう言って、うふふっ、と笑いながら、美保さんが脚の付け根を、手でまさぐるようにする。

「あ、うん……はあ、はあ……どう？ 研ちゃん……してみたい……？」

「いいの……？」

「うん……初めての相手が、あたしなんかでよければ……」

「したい、したいよ……！ 僕……美保さんと……セ、セックス……したい……！」

僕は、乗り出すような格好で、余裕なくそう言った。

くすっ、と美保さんが優しく笑う。

「じゃあ、いいよ……あたしも、研ちゃんとしていたいから……」

そう言われて、僕は、ようやく体を動かすことができるようになった。

美保さんの体に、両手と両膝をシートについて、覆い被さるようになる。

膝を置く場所に迷ってると、美保さんが、そっと脚を開いてくれた。

「腰を落として……」

そう言って、美保さんが、僕のペニスに右手で触れ、アソコに導く。

見ると、美保さんの左手は、人差し指と中指で、ぱっくりとアソコを開いていた。

(うわあ……あ、あそこに……入れちゃうんだ……)

美保さんにリードされるまま、そんなことを思う。

ペニスの先端が、美保さんのそこに触れた。

「来て……」

囁くような、美保さんの声。

僕は、ぎくしゃくと肯いたまま、腰を進ませた。

ぬるん、と勃起したペニスが、肉のぬかるみの中に入っていく……。

(あれ……？)

想像していたのとは全然違う感覚が、僕のペニスを包み込んだ。

(あ、熱い……っ！)

感触よりも、温度が、美保さんの中に入っているんだという実感をもたらす。

「み、美保さん……僕……」

体を前に倒し、美保さんの体を抱き締めながら、僕はまるでうわ言みたいな声を出してしまった。

「研ちゃん、どう……？」

「すごい……すごく、熱いよ……」

「……気持ちいい？」

「う、うん……きもちいい……っ！」

そう答えて初めて、それが、快感だということに気付いた。

熱い快感が、これ以上はないというくらいに勃起して敏感になったペニスを包み込んでいる。

「うふ……じゃあ、腰を動かして……もっと気持ちよくなるから……」

「う、うん……」

はあっ、はあっ、と息を吐きながら、ぎこちなく腰を使い始める。

甘い熱がさらに高まり、それと、ペニスが同化していくような感覚——

「あ、うっ……す、すごい……」

「あ、んんっ……はあっ……そうよ、もっと、動いて……」

「うんっ……はあっ、はあっ、はあっ、はあっ……あうっ……！」

少しずつ、少しずつ、自分の腰の動きがスムーズになっていくことが分かる。

「んっ、んんんっ……いいわ……いい……研ちゃんのが、あたしの中を……あんっ、ああんっ……」

胸を愛撫していた時と同じような甘い喘ぎを、美保さんがあげる。

でも、それは、胸を愛撫していた時よりも、何て言うか、深い感じの声だ。

「み、美保さん……きもちいいの……？」

「うん、いいの……あっ、ああんっ……きもちいい……研ちゃんっ……！」

ぎゅっ、と美保さんが僕の背中に手を回し、力を込める。

「ああっ、美保さん、美保さんっ……！」

美保さんが感じて、ということに、感動すらしながら、僕は、懸命に腰を使う。

いつしか、腰の辺りで高まる快感は、どうにもならないくらいに高まっていた。

「あ、ああん、あっ、ああっ……！ け、研ちゃん、激しいっ……！ あああんっ……！」

「だ、だって、美保さん、僕、僕っ……と、止まらないよ……あああっ！」

ドロドロと熱く渦巻く快樂に、むず痒さのようなものが混じる。

そのむず痒さは、ペニス全体に広がり、一つの欲求へと変化していった。

「あ、ああんっ……研ちゃん、出そうなの……？」

美保さんが言おうとしていることの意味が、時間差で脳に届き、僕は、こくと肯いた。

「うん、うんっ……で、できるだけ、我慢して……ね？」

美保さんのその言葉には、まるで、甘えるような響きがあった。

「でも、もし、どうしても我慢できなくなったら……出して、いいから……あ、うくうんっ……！」

「み、美保さんっ……！」

美保さんの願いに答えたくて、僕は、迫り上がる射精感を歯を食い縛って耐えた。

ペニスの付け根に、かすかに痛みを感じる。

それでも、美保さんと、そして僕自身の快感をできるだけ高めたくて、僕は、夢中で腰を使った。

「あっ、ああんっ、あうっ……す、すごい……研ちゃん、すごい……ああ、素敵っ……！」

僕の腕の中で、美保さんが喘ぎ、悶えている。

そんな美保さんを逃すまいとするようにきつく抱き締めながら、僕は、本能の赴くままに、抽送を続けた。

摩擦がもたらす熱と快樂が、かつてなかったほどに射精欲求を高めていく。

限界、だった。

「ご、ごめん……ごめんなさい、美保さん……僕、もう……」

「いいの、いいのよ、研ちゃん……出して……精液、いっぱい出してっ……！」

「ああっ、み、美保さんっ……！」

がくがくがくがく……という僕の最後の腰の動きは、ほとんど痙攣だったと思う。

そして——僕は、美保さんの中に——

びゅびゅっ！ びゅるるるる！ びゅっ！ びゅっ！ びゅっ！ びゅっ！

「あああつ、す、すごい！ 研ちゃんのが……！ あああんっ！ あたし、あたし……うそつ、イ、イっちゃうっ！」

びくっ、びくっ、びくっ、びくっ……！

美保さんの体の震えを、腕で感じる。

「はあっ、はあっ、はあっ、はあっ……」

「はああ、はああ、はああ、はああ、はああ……」

美保さんと僕が、体を重ねた状態で、息を整える。

「あつ、あああ……ああんっ……すごい……射精されて、イっちゃった……」

ぼんやりとした声で、美保さんが言った。

「美保、さん……」

うまく力の入らない体をどうにか起こし、美保さんの顔を覗きこむ。

「やん……そんなふうに見ないで……」

美保さんは、はにかむように笑いながら、僕の頭を抱き寄せた。

ちゅっ……と唇が、重なる。

僕と美保さんは、目を閉じ、互いの舌と唇を触れ合わせた。

しばらくそうしてから、頬と頬とをこすりつけるようにして、身を寄せ合う。

僕も、美保さんも、すごく汗をかいていた。

「いっぱい出したね……研ちゃん……」

「う、うん……」

どう答えていいか分からなくて、とりあえず、肯く。

そんな僕の背中を、美保さんの指先が、撫でた。

「うふ……研ちゃんのが、あたしの中に染み込んで……ちよつと、ぴりぴりする……。でも、きもちいい……」

「美保さん……」

首をひねって、美保さんの方を向く。

と、美保さんも、僕に顔を向けていた。

至近距離で、瞳と瞳が合う。

美保さんの顔には、僕がこれまで見たことがないような、綺麗で、可愛くて——そして妖しい表情が浮かんでいた。

「これで、あたし……研ちゃんの女だよ……」

思いもかけなかったその言葉に、僕は、ぞくぞくと体を震わせながら……こくん、と肯いていた。

第三章
—夏の嵐—

雨が、アルミサッシの雨戸を叩く音で、目が覚めた。
半分寝ぼけながら頭を巡らすと、同じベッドの中に、美保さんがいた。
その無邪気な寝顔を、僕は、至近距離でまじまじと見つめてしまう。
ぽってりとした赤い唇がゆるく開いている様は、まるで、口づけを誘ってるみたいに見えた。
横向きになった体は——僕もそうなんだけど——裸で、ゆっくりとしたリズムで上下している。
規則正しい寝息が、強い雨と風の音に紛れながら、耳に届いた。

「美保、さん……」

そう、声をかけると、長いまつげに縁取られた美保さんの目が、うっすらと開いた。

「……おはよう」

そう言いながら、美保さんが、タオルケットを体に寄せ、自らの体をくるむ。

「美保さん……」

僕は、美保さんの唇に、唇を寄せた。

ちゅ……と軽いキスを交わしてから、互いの顔を見つめる。

「シャワー、浴びよっか」

「……うん」

美保さんの言葉に、僕は小さく肯いた。

僕と美保さんは、当たり前みたいに、一緒にシャワーを浴びた。
もちろん、僕が、全く平静だったという訳じゃない。
それどころか、股間のものは、朝目覚めた時から、ずうっと立ちっぱなしだった。
二人で入っても多少は余裕のある広いお風呂場で、わざと体を寄せて、いっしょにシャワーを浴びる。

「あん……研ちゃんの、固くなってる……」

股間の強ばりを白い太腿に押し付けると、美保さんは、甘い声で言った。

「ね、どうしてこんなに固くしてるの……？」

「え、えっと、それは……」

朝だから、と言おうとして、僕はちょっと口をつぐんだ。

それは、美保さんが求めている答えじゃないだろうし——それに、本当のことでもない。

「美保さんが、そばにいるから……」

「うふっ……うれしい……」

そう言って、美保さんが、ぬるま湯を出していたシャワーを止めて、僕の足元にひざまずく。

「あっ……み、美保さん……？」

美保さんの形のいい鼻先に、びんびんになってしまったペニスを突き付けるような格好になって、僕は、思わずうろたえた声をあげた。

「ねえ、研ちゃん……してほしい？」

甘い声でそう尋ねてくる美保さんの息を、ペニスの先端で感じる。

「う……うんっ……」

「ふふふ……何を、してほしいの？」

自分から訊いてきたのに、美保さんは、そんなことを言いながら、いたずらっぽい目で僕を見上げた。

唇が、寸前まで僕の勃起に近付き、そこで止まっている。

「だ、だから……フェラチオ……」

「んふっ……そんな言葉知ってるのね……。いやらしい研ちゃん……」

美保さんは、どこか嬉しげな声で、そう言った。

「ね、ねえ、美保さん……」

僕は、そのまま乱暴に腰を突き出してしまいそうになるのを必死に我慢しながら、美保さんに声をかけた。

「してほしいの？ フェラチオ……」

美保さんが、小首を傾げて、そう訊いてくる。

「う、うん……して、ほしい……」

「じゃあね、もっと、エッチにおねだりしてみて……」

「エ、エッチに……？」

普段の美保さんからは考えられないようなセリフに混乱しながらも、僕は、一生懸命に考えた。

「だ、だから……えっと……僕の、チ、チンチン……美保さんの口で、舐めて……く、くわえてほしい……それから……その……吸ったりとか……」

「わかったわ……してあげるね」

そう言って、美保さんは、ぱくっ、と僕のペニスをその口で啜えた。

「あ、ああ……っ」

生温かい柔らかさに勃起した肉棒を包まれ、僕は、うろたえた声をあげた。

想像していたよりもはるかに気持ちよくて——そして、想像していたのと全然違う感触。

それが、僕のペニスを、じょじょに根元までくるんでいく。

「あ、あうっ……あ、んっ……」

僕は、足をカクカクと震わせてしまった。

「んちゅ……んっ……んふふ、立ってられない？」

一度ペニスから口を離して、美保さんがそう尋ねる。

「うん……」

「じゃあ、そこに座って」

言われて、僕はバスタブに腰掛けた。

おふろ場のタイルの上にお尻をついて座り込んだ美保さんが、僕の足の間に顔を潜らせ、勃ちっぱなしの肉棒に唇を寄せる。

「あ、ああんっ……」

ずるんっ、って感じで一気に啜えられて、僕は声をあげてしまった。

座っているので、さっきよりもずっと、快感に意識を集中できる。

「んっ、ちゅぶ、ちゅぶぶ、んちゅっ、んむ、んふうん……」

美保さんの口元から、湿った音と、可愛い息の音が漏れる。

僕は、それを聞いて、自分でも分かるくらい、先端から先走りの液を溢れさせてしまった。

「んっ、んちゅっ、ちゅむ……ああん、研ちゃんの先っぽから、苦いおつゆが出てきてる……」

「ご、ごめんなさい……」

「いいのよ……あたしのお口で気持ちよくなってくれる証拠だもの……もっと出してもいいのよ……」

そんなことを言いながら、美保さんが、まるで見せつけるみたいに、舌を突き出して先端をねろねろと舐める。

「あうっ、あん、ああんっ……きゃっ、ひやうっ……！」

口から、自然と高い声が漏れた。

美保さんは、先っぽを舐め続け、竿のところを指先で扱き、そして垂れ下がった袋を柔らかく揉んでくれた。

ぴゅるっ、ぴゅるっ、と透明な汁が溢れ、美保さんの舌を汚す。

「ああっ、み、美保さんっ……」

「うふふ……研ちゃん、可愛い声……女の子みたい……ちゅっ、ちゅむむ、んちゅうん……」

「ああんっ……そ、そんなこと……はっ、はあっ、あっ……あああっ……！」

亀頭の部分を重点的に攻めていた口が、再び、根元までペニスを啜え込む。

そのまま、美保さんは、大きく頭を前後に動かした。

「んっ、んぐっ、んぶ……んっ、んっ、んっ、んっ、んっ、んっ……」

「あはあっ……そ、それ、すごい……あああっ……で、出ちやいそう……！」

竿を、ピツタリと締められた唇で扱かれた上に、裏側を舌でくすぐられ、僕は、もう耐えられなくなった。

痛いくらいの気持ちよさが、鋭くペニスを貫く。

肉棒の根元に熱い欲望がたまり、その圧力は限界まで高まって、苦しいくらいになっていた。

「もう、もうだめエ……出ちやうよ……み、美保さんっ……！」

「ちゅっ、ちゅぶぶ、んちゅうっ……いいのよ……遠慮なんてしないで……」

「でも、でも……でもっ……！」

大好きな美保さんの口の中を精液で汚してしまうことへの抵抗に、僕は、必死になって射精をこ

らえた。

「もう……研ちゃんてば強情ね……。でも、こうしたらどう？」

「あ、あああ、あああッ！」

じゅぼぼ、じゅぼぼ、じゅぼぼ、じゅぼぼ……！

美保さんが、僕のペニスを吸引しながら、ピストンを激しくした。

鮮烈な痛みが、さらに鮮烈な快感と混じり合い、僕のガマンを呆気なく破裂させる。

「あっ、ンあああああああっ！ ダメっ！ 出ちゃうっ！ 出ちゃうっ！」

そう叫びながら、僕は、美保さんを押しつける代わりに、前屈みになって、その頭を思い切り腰に押し付けてしまっていた。

「んっ……んんんんんんんんっ♪」

かなり苦しいはずなのに、美保さんの声は、なんだか嬉しげだった。

「あ——出るっ！」

びゅぶっ！ びゅるるる！ びゅっ！

背徳的で冒瀆的な——凄まじいまでの解放感。

それを感じながら、僕は、美保さんの口の中にとっぷりと射精してしまっていた。

「んっ、んんっ、んぐっ……んく、んく、んく、んくっ……」

信じられないことに、美保さんは、僕が出したものを、喉を鳴らして飲み干していた。

「ぷふう……はあん、研ちゃんてば、すごおい……はふう……」

目を細め、どこか満足げな顔で、美保さんが言う。

「美保さん……」

「研ちゃん、そんな顔しないで……。あたし、研ちゃんの精液飲めて、とっても嬉しかったんだから」

「え……？」

「本当よ」

頬を染め、笑みを浮かべた美保さんが、立ちあがる。

「女はね、これって決めた男の人に悦んでもらうのが、とっても嬉しいの。……それに、そういう人のオチンチンに色々されちゃうのって、とってもカイカンなのよ」

「そ、そうなの……？」

「少なくとも、あたしは、ね♪」

そう言って、美保さんは、僕に右手を差し出した。

「立てる？」

「う、うん」

美保さんの手を取って立ちあがると、きゅっ、と優しく抱き締められた。

窓の外で、風が鳴り、雨が激しく地面を叩いている。どうやら、台風がこの近くに上陸しようとしてるらしい。

「すごい雨と風ね……」

「うん……」

美保さんが、僕を抱き締めたまま、言った。

「今日は……一日ハダカで過ごしちゃおっか？」

「えええっ？」

「だって、この天気だったら、どうせお客さんなんて来ないし……それに、あたしのお仕事もお休みだもの。ね？」

美保さんは、悪戯っぽい目で、僕の顔を覗きこんだ。

脱衣場で、体を拭いた後、ちょっと考えた。

ハダカということは、つまり、腕時計もなしって事だ。……当たり前だけど。

何となく、左手首の傷を、隠すように右手で撫でてしまう。

「研ちゃん」

と、後ろから、声をかけられた。

「……」

振り向くと、美保さんが、穏やかな顔で笑いながら、僕の左腕を取った。

そして、僕の左手を持ち上げるようにして——ちゅっ、と手首の傷痕にキスをする。

「いいのよ。今日は隠さなくても」

そう言われて、僕は、少し涙で目を潤ませながら、こくり、と肯いた。

何も着ない状態で食べる朝ご飯は、何だかヘンな感じだった。

変な気分のまま、横に並ぶでも無く、向かい合わせになるでもなく、90度の角度でちゃぶ台について、テレビを視ながらご飯を食べる。

天気予報によると、台風は、ここらへんをかすめるようにして本州を南から北に縦断するらしい。直撃コースではないので、家が倒れたりするようなことはないと思うけど、激しい雨と風は一日中続きそうだった。

「この家、古いけど、雨漏りとかは全然無いのよ」

どこか自慢げに、美保さんが言う。

その美保さんは、体に何も身につけてなくて、そのくせ、腕で胸のところをさりげなく隠してたりしていた。

頬が赤くなってるところを見ると、恥ずかしいとは思っているみたいだ。

いや、それとも、もっと別の理由で顔を上気させているのか……。

そもそも、美保さんは、いったいどういうつもりなんだろう？

どうして裸のままなのかってことも、今一つ分からないし……。

それ以上に、どうして、いきなり僕とああいう関係を結んだのかが、分からない。

ただ、僕自身も、それについて深く考えることに、正体不明の不安を感じていた。
(大好きな美保さんとエッチできるんだから、どうしてそれ以上考えることがあるんだよ……)
僕の中の、最も能天気な部分が、そう主張してる。

「……」

僕は、朝ごはんを終え、洗い物をしている美保さんの後ろ姿に、視線を向けた。
美保さんが、素肌に直接ピンク色のエプロンをつけて、食器を洗っている。
可愛いちょうちょ結びの下に、丸いお尻が、あった。

「んくっ……」

僕は、思わず生唾を飲み込んで、美保さんの背後に近付いていった。
美保さんは、僕の知らない歌をハミングで口ずさみながら、白い泡にまみれたお皿やお茶碗をすすいでいる。

それが一段落したのを見計らって、僕は、後ろから美保さんに抱き着いてしまった。

「きゃんっ……け、研ちゃんてば……」

声をあげる美保さんのお尻の割れ目に、すでに熱くいきり立っているペニスを押し付ける。

「美保さん……」

僕は、我ながら甘えた声でそう言いながら、手を前に回し、美保さんのたっぷりとした胸に手を重ねた。

そして、エプロンの、胸元を覆う布地を、乳房の間に挟むような感じで中央に寄せる。

「あうん、ふん……あふうん……」

たふたぶとした白い乳房を手で揉むと、美保さんは、鼻にかかったような喘ぎ声を漏らした。
巨大なマシュマロを思わせる柔らかなオツパイの頂点で、ダークローズの乳首がボッキしてる。
僕は、堅くなった乳首を、指先でコリコリと刺激した。

「あっ、きゃううんっ……はっ、はああ……やあん、感じちゃうっ……」

美保さんが、僕の手から逃れようとするかのように、身をよじる。
うねうねと動く美保さんの体を、僕は、上から下へと手の平で撫でた。
滑らかで、それでいてしっとりとした肌の感触は、まるで手に吸い付くようだ。
僕は、いつの間にか、後ろから腰を押し付けた格好のまま、美保さんのお尻を抱えるようにして撫で回していた。

「あっ……やん、やんっ……お尻は、ダメ……」

美保さんが、困ったようにそう言いながら、こっちを見る。

「どうして……？」

「だ、だって……あん……お、おつきいでしょ……あたしのお尻……」

「……うん」

「いやあん、やっぱり、そう思ってるう」

美保さんが、子供みtainな声をあげて、顔を真っ赤にした。
その表情は、何だか、本気で自分のお尻のことを気にしてるみたいだった。

確かに、美保さんのたっぷりしたお尻は、僕の腰よりもはるかに幅がある。

「で、でも、僕……美保さんのお尻、好きだよ」

「うそうそっ！ うそ言わないでっ！」

「うそじゃないよ……！」

「でも、だって……やっぱり、みっともないよオ。歌でも、“お尻のちっちゃな女の子”って言うじゃない」

僕は、その歌は知らなかったけど、そのことはとりあえず言わないことにした。

「とにかく、僕、美保さんのお尻、大好きだよ……」

そう言って、台所の床に膝をつく。

「け、研ちゃん、なにををするの……ああんっ！」

僕は、美保さんのお尻の割れ目に口を寄せ、ちゅっ、とキスをした。

「ああん、だ、だめえ……お尻、やあんっ……」

そう、今までにないくらいうろたえた声を上げる美保さんがなんだか可愛くて、何度も何度も、お尻にキスをする。

美保さんの足の間では、アソコが、じつりと濡れていた。

でも、この格好だと、そこには口が届かない。

「ねえ、美保さん……お尻、もっと後ろに突き出して」

「やあっ……恥ずかしいよお……」

そう言いながらも、美保さんは、ゆるゆるとお尻を突き出し、そして、足を軽く開いた。

言葉では何と言おうと、美保さんも期待しているんだ……と思うと、よけいに興奮する。

そして、そうするのが当然であるかのように、僕は、美保さんのアソコに口を押し当てた。

「あうんっ……！」

明らかな喜びの声を、美保さんが漏らす。

僕は、床に正座するような格好になり、わずかに上を向きながら、美保さんのアソコをぴちゃぴちゃと舐め回した。

舌に、柔らかな肉の感触と、体液の味を、感じる。

「あんっ、あふうん、あっ……け、研ちゃん、すごい……あん……すごい……」

美保さんが気持ち良さそうな声を出してくれるのが嬉しくて、ボリュームのあるお尻を両手で抱えるようにしながら、ますます熱心に舌を使う。

あふれ出た愛液が、僕の口元をたちまちのうちに濡らした。

「あん、あんあん、ああんっ……はあっ……すごい、上手ウ……ああんっ……あ、あ一つ……！」

美保さんが、流しの縁をぎゅっと握りながら、はあはあと息をする。

「ね、ねえっ、お願い……ク、クリも……クリトリスも舐めて……お願いよ、研ちゃん……」

悩ましい声でそう言われて、僕は、アソコの前の方を、舌でまさぐった。

「はあ、はあ、はあん……ひやうっ！」

美保さんの反応で、舌先が、そこに到達したのを知る。

僕は、舌を尖らせるようにして、美保さんの一番敏感な部分をペロペロと舐めしやぶった。

「はっ、はひっ、や、やあんっ……す、すごくイイ……ああん、イイの……はああっ……！」

美保さんの声が、ますますとろけていく。

「ああ、ああん、あああんっ……すごいつ、んひいつ……！ ああ、もうダメ……ダメえ……っ！ 感じるっ！ 感じるうっ！」

「美保さん……きもちいい？」

「いいっ！ いいの……ああ～んっ、き、きもちイイ……ガ、ガマンできなくなっちゃう……！ くふうっ……！」

ぴゅるっ、と美保さんの割れ目から、透明な液がしぶく。

「け、研ちゃん、お願い……もう、入れて……！ 研ちゃんのおつきなオチンチン、あたしのアソコに入れてっ……！」

「う、うんっ！」

僕は、あたふたと立ち上がり、さっきから上を向きっぱなしのペニスに、手を添えた。

「い、入れるよ、美保さん」

「ああ、早くっ……おねがい……」

さらにお尻を突き出しておねだりをする美保さんのクレヴァスに、ペニスの先端を潜り込ませる。

そのまま、僕は、美保さんのお尻を抱えて、腰を進ませた。

「あ、あうっ……はああああっ……！」

美保さんは、猫が背伸びをするような格好で、背中を反らせた。

「はあ、はあ、はあ……すごいわ……ああん、どんどん入ってくる……あああんっ！」

「み、美保さんっ……すごく熱いよ……！」

「研ちゃんのも……研ちゃんのおチンチンも熱いの……！ 熱くて、固いのが、お、奥に……ああんっ、き、きたあ……っ♪」

先端が、美保さんの一番奥にまで届いた。

「ああっ……わ、分かる？ 研ちゃん……そこが、あたしの子宮の入り口よ……」

「うんっ……なんか、コリコリしてる……」

「ああっ、そ、そこ、すごく感じるの……ねえっ、もっとグイグイ押し付けて……！」

「こ、こう？」

「ああっ！ そ、そう……っ！ ンはあんっ、し、子宮しびれちゃう……！」

赤ちゃんが宿る場所、というイメージしかなかった“子宮”という単語が、今は、ひどくいやらしく聞こえる。

「はっ、はっ、はっ……み、美保さん、動かしていい？」

「ああん、も、もちろんよっ……動かして……！ オチンチン、ズボズボして……っ！」

「み、美保さんっ！」

信じられないくらいエッチな美保さんの言葉に、僕は、猛然と腰を動かした。

熱く柔らかな膣肉が、僕のペニスをこすりあげる。

「ああんっ！ あっ！ あっ！ あっ！ あっ！ は、激しいっ……！ ああんっ！」

「あはあっ……き、気持ちいいよっ……すごいっ……！」

実際、朝に一度出していなければ、すぐに射精しちゃったと思う。それくらいの気持ちよさだった。

「きもちいい……美保さんのおっきなお尻、とつてもきもちいいよ……」

「あん、あん、イ、イジワルう……お、お尻のことは、もう言わないで……ああんっ……！」

「だ、だって、すごいんだもん……ああっ、美保さんっ……」

ぱん、ぱん、ぱん、ぱん、と音をたてて、僕の腰が美保さんのお尻を叩く。

その音を心地よく聞きながら、僕は、美保さんのお尻に指を食い込ませ、むにむにと揉んだ。

「あんっ、あんあん……やああ～ん……あひいいいいっ……！」

きゅうっ、きゅうっ、と美保さんのアソコが僕のペニスを締め上げる。

「ああ、美保さん……僕、もう……！」

「来て……来てっ……！ あたしも、もうイクの……ああんっ、イっちゃうっ！ イっちゃうっ！」

ぐいん、ぐいん、と美保さんがお尻を動かす。

その動きで、僕は、ガマンできないところまで追い詰められてしまった。

「あああ……っ！ で、出ちゃう……！」

「出して……！ 出して……！ 出してえっ……！ イッパイっ……オチンチンから、セイエキ出してェ……！」

「っ……！ あ、あああ、あっ……！」

びゅるるるるる！

自分でも驚くほどの勢いでペニスの中を精液が走り抜け、先端からほとばしる。

「あんっ！ ああんっ！ イッ、イクっ！ イクーっ！」

僕の精液を膣奥で受け止めながら、美保さんが、ビクビクと体を震わせる。

僕は、二度、三度、痙攣するように腰を動かしてから、がっくりと上体を倒した。

「ハア、ハア、ハア、ハア、ハア、ハア……」

美保さんのなだらかな背中に体を重ね、激しい射精の余韻にひたりながら、荒い息をつく。

「んっ……あああ……あつい……あついわ……研ちゃんの、セイエキ……あはあん……」

美保さんは、ひくっ、ひくっ、と体を震わせながら、そんなことを言った。

そして、僕は、その後も何度となく、美保さんと交わった。

洗面所で、居間で、トイレで、廊下で……。

雨と風がサツシを揺らし、鳴らす中で、僕は、美保さんを何度も何度も抱いた。

美保さんが恥ずかしそうに悶えるところを見たくて、わざと、バックでした。

「あん、あんん、ああん……ど、どうして、後ろからばかりなの……？」

廊下で、四つん這いの姿勢で僕のペニスの動きを受け止めながら、美保さんが訊いた。

「だって……こうやって、美保さんのお尻を抱えながらすると、すっごく気持ちいいんだもん……。
それに、美保さんも、何だか可愛い声出すし……」

「やんっ、やんっ……可愛いだなんて……け、研ちゃんてば……あくうんっ……！」

「そう、その声……す、すごくいいよ……。美保さんだって、恥ずかしそうにしてるけど、ほんとは余計に感じてるんでしょ？」

僕は、興奮のあまり熱に浮かされたようになって、そんなことを言った。

「そ、そんなこと、ないわ……あん、ああんっ……！」

「ウソ……ほら、中が、きゆうきゆう動いてる……僕のを、締め付けてるよ……」

「あ、ああん、だってえ……あん、あんあんんっ！ け、研ちゃんのイジワルっ……イジワル、イジワルうっ……あはあ、はん、はああんっ……！」

そう言いながらも、美保さんの声は甘くとろけ、体はいやらしくうねっていた。

板敷きの廊下に、二人の汗と、つながった場所から盛れる液体が、ぽたぽたと滴る。

美保さんの愛液にまみれたペニスが、熱い肉のぬかるみに出入りする様を見ているうちに、僕は、その日何度目かの射精欲求を感じていた。

「ねえ、美保さん……もう、出していい……？」

「うんっ、いいっ、いいよっ……！ 研ちゃんの、中に出してもらえば、あたしも、たぶん、イク、から……ああああああんっ！」

そう言いながら、美保さんは、大胆にお尻を前後に揺らし、左右に振った。

さらには、アソコの中の肉がグニグニと動き、僕のペニスを根元から先端へと締め付けてくる。

「あっ、うああっ！ アソコに搾られてるみたい……あああっ！」

「うふっ……そうよ……あたし、研ちゃんのオチンチンから、オマンコでミルク搾っちゃうんだからっ……んっ、んくううううんっ！」

「あっ、あっ、あっ、あーっ……！ で、出るッ……！」

びゅーっ！ びゅーっ！ びゅーっ！ びゅーっ！

激しい勢いで、何度も何度も、精液を放つ。

「あっ、イ、イク、イクら……っ！ イっちゃうううううう〜っ！」

美保さんが、まるで犬か猫みたいな姿勢のまま、背中を反らすようにして、絶頂を極めた。

そんな美保さんのお尻を引き寄せ、腰を密着させて、最後の一滴まで、ザーメンを注ぐ。

僕は、美保さんの全てを征服してしまったような気持ちになった。

「はあっ……はあっ……はあっ……はあっ……はあっ……はあっ……」

僕は、まだ萎えてないペニスをゆっくりと抜き、ぺたんとその場に座り込んだ。

しばらく後、まだお尻を高く上げたままの美保さんのアソコから、とろーっ……と僕の精液が溢れる。

僕は、それをぼんやりと眺めながら、新たな欲望が胸の内に湧き起こるのを感じた。

そして――

そして、僕は、その後も何度となく、美保さんと交わったのだった。

セックスして、裸のままちょっと家事をして、またセックスして、一緒に夕飯を作って、そしてまたセックスして、テレビを視て、それからまたセックスをした。

少しずつ、外の台風は、力を弱めているようだった。

そして、いつの間にか、僕と美保さんは、美保さんの部屋に敷かれた布団の上で、並んで横になっていた。

仰向けになって、ぼんやりと天井を見ている僕の右側に、美保さんがいる。

美保さんは、僕に寄り添うような感じで、左側を下にして横になっていた。

美保さんの右手が、さっき精液を放ったばかりの僕の肉棒を、指先でイタズラするように扱っている。

その刺激で、僕のペニスには、またも血液が集まりだしていた。

「う……っ」

思わず、僕は小さくうめいてしまう。

「どうしたの？」

「ちょっと……ヒリヒリする……」

「痛いなの？」

「ん……少しだけ……」

僕がそう言うと、美保さんは、ペニスをいじるのをやめた。

何となくそれが寂しくて、美保さんの方を向く。

「もしかして……まだしたいの？」

「……うん」

「痛いんじゃないの？」

「痛いけど……やっぱり、したいよ……」

「もう……しょうがないわね……」

そう言いながらも、美保さんは、ぺろりと舌で唇を舐めた。

「でも、研ちゃん、疲れてるんでしょう？」

「それは……」

「いいわ。あたしが、上になってあげる」

そう言って、美保さんは、僕の体に覆いかぶさった。

釣り鐘型になった大きな胸が、僕の胸に触れる。

騎乗位——言葉は知ってるけど、初めての体位だ。

「いくわよ……」

そう言って、美保さんは、僕のペニスを右手で優しく握り、もぞもぞと腰を動かした。

くちゅ……と濡れた肉ひだに、僕の肉棒の先っぽが触れる。

「んっ、んんっ、んふ……んんっ……」

美保さんが、僕の腰に腰を密着させるようにする。

ずぶずぶ……と、温かな肉の狭間に、僕のモノが飲み込まれていく。

「あ、ふうっ……まだ入ってくる……研ちゃんの、とっても立派よ……あうんっ……！」

そして、とうとう、アソコに根元まで僕のペニスが収まった。

「はあ、はあ、はあ……み、美保さん……」

「研ちゃん……」

僕と美保さんの唇が、重なる。

「ふーっ、ふーっ、ふーっ、ふーっ……」

鼻から惱ましい息を漏らしながら、美保さんが、ゆっくりと腰を動かし始める。

ねっとり絡み付くような湿った感触が、ずずず、ずずず……と僕のペニスをこすり上げる。

「ふ、ふああっ……す、すごい……研ちゃんの、とっても固いわ……あううっ……」

「はあっ、み、美保さんの中、とっても柔らかいよ……それに、とっても熱い……」

「うん、うん、うん、うふ、ふうん……ああっ、研ちゃん……つらくない？」

「そんなことはないよ……ああ、ああ、ああ……ず、ずっと、このままつながってたい……ずうっとセックスしてたいよオ……！」

ズキズキと疼くような痛みと、それを上回る快感に、僕は、そんなことを口走っていた。

「あはあっ……う、嬉しいっ……！」

そう言って、美保さんが体を起こした。

そのまま、まるで体に火がついたみたいに、激しく腰を使う。

「あっ、あっ、あっ……み、美保さんツ……！」

僕は、たぶたぶと揺れる美保さんのオツパイに両手を伸ばした。

そして、指が食い込むくらいに、手の中の柔らかな乳房をこね回し、揉みしだく。

「あん、ああん、あん、あん！ も、もっと……もっとオツパイ揉んでっ……！」

「こう？ こう？ これでいいのっ？」

「そう、そうよ、そう……あ、ああああああっ！ いいっ、いいいいいい！ も、もっと……ああああんっ、あんっ！」

美保さんは、僕がもたらす快感に、体をくねらせ、首を振った。

髪留めが弾け飛んだのか、ばさりと美保さんの黒髪が広がり、乱れる。

「ああっ、あっ、あっ、あーっ……！ す、すごいっ……ああんっ、ああああっ……！ か、研ちゃん……っ！ 乳首も、乳首もシテっ！」

「うんっ……！」

僕は、すでに充血し、固くしこっている美保さんの乳首を指でつまみ、くりくりといじくった。

「ああっ！ イイツ、イイツ、イイツ、イイ〜ッ！ もっと、もっとシテっ……！ あうっ！ ああああああああああああ！」

美保さんの求めに応じ、乳首を引っ張り、指で扱く。

そうしながらも、僕は、美保さんのアソコによってもたらされる快感に、いっぱいいっぱいになって

第四章 —夏の影—

そして、何日かが過ぎた。
あの、台風の日以来、僕と美保さんは、何度となく、体を重ね合った。
午前中は、たまに智沙ちゃん来るし、午後は美保さんは仕事なので、あの日ほど立て続けにはしなかったけど……それでも、昼夜関係なく、セックスした。
そして、一週間近くが経った。

その日、美保さんは、急な仕事の都合で、朝ごはんを食べてすぐに仕事に出かけていた。
アブラゼミの鳴き声を聞きながら、部屋で、本を読む。
午後は、一人だけで、海に出かけてみようか……と、左手首の傷を隠す腕時計をいじりながら、考えた。
ちょうど、その時だった。
ぴんぽーん。
家のチャイムが鳴ったのだ。
「はい……。あ、智沙ちゃん」
玄関を開けると、そこに立っていたのは、智沙ちゃんだった。
もうとっくに夏休みだろうに、相変わらず学校の夏服を着ている。けど、それが何だか智沙ちゃんには似合っているように思えた。
「えっと……美保さんなら、仕事で留守だよ」
「知ってるわ。携帯にメール来てたもの」
切って捨てるような口調で、智沙ちゃんがそう言う。
「今日は、君に用事があって来たの」
「僕に？」
僕は、思わず声をあげてしまった。
だって、智沙ちゃんは、今までずっと僕を無視していたからだ。
僕が美保さんの家に来てから、これまで何度か、智沙ちゃんがここを訪れることはあった。智沙ちゃんは、美保さんに勉強を教わっているのだ。
けど、その時も、僕と智沙ちゃんは話らしい話をしたことがなかった。
「えっと……どんな用事？」
「ここじゃ話せないわ。うちに来てくれないと」
「って、智沙ちゃんの家には？」

「そうよ。……あ、あと、それから、“ちゃん”付けて呼ぶのはやめてってば」

「ん……うん」

そう言われても、どう呼んでいいのか分からないので、とりあえず曖昧に返事をする。

「とにかく、私の家に来て。自転車なら、美保さんのを借りれるんでしょう？」

「そりゃまあ、そうだけど……」

しかし、こんな非友好的な招待に、どうして応じなくちゃいけないんだ？

僕の顔には、おそらく、そういう表情が浮かんでいたと思う。

と、智沙ちゃんは、少し僕に顔を近付けて、言った。

「——君と、あと美保さんとのことで、話があるの」

その言葉に、僕は、思わず凍りついてしまった。

智沙ちゃんの乗る自転車の後を、美保さんの自転車にまたがって、追いかけていく。

空は晴れ。時折、大きな白い雲が、上空を横切る。

地面に落ちる影はすごく濃い色で……僕の心にも、そんな暗い影が差していた。

(いったい……智沙ちゃんはどういうつもりなんだろう？)

青々とした田んぼや雑木林に挟まれた片側一車線の道路を走りながら、そんなことを思う。

智沙ちゃんのセミロングの髪が、後ろにたなびいている。もちろん、その表情はこちらからは見えない。

智沙ちゃんが何を考えているのか——この夏に再会して以来、ずっと、それは謎のままだ。

道が、ちょっとした丘に差しかかった。この丘を越えてしばらく行くと、智沙ちゃんの家のはずだ。

と、丘の頂き辺りで、不意に智沙ちゃんが自転車を止めた。

「？」

少し驚いて自転車を止める。

智沙ちゃんが、肩に斜めにかけていたカバンから何かを取り出した。

智沙ちゃんの小さな手には似合わない、大きくてごつごつした一眼レフカメラだ。

素早く、そして正確な動きでカメラを構え、林と道の境目にある小川の一角に、レンズを向ける。

見ると、そこに、はっとするほどに青い目の色が鮮やかな、一匹のトンボがいた。

連続して、小さなシャッター音が響く。

しばらくすると、そのトルコブルーの目をしたトンボは、滑るように道を横切り、林の中へと飛び去ってしまっていた。

「……………」

智沙ちゃんが、カメラ本体の後ろ側にある液晶モニターで、今撮ったばかりの写真を確認している。どうやら、一眼レフのデジカメらしい。

デジカメと言えばポケットサイズの奴しかイメージになかった僕には、しっかりしたレンズのつい

ているそのカメラが、とても本格的な物に見えた。

智沙ちゃんの後ろから、思わずモニタをのぞき込む。

透明な水の流れる沢から伸びた草の上に止まった、青い目のトンボ——それが、素人目にもしつかりとした構図の中に収まっている。光線の具合が良かったのか、特徴的な目の色は、肉眼で見た時よりもさらにきれいに写っているようだった。

「ヤブヤンマのオスよ」

僕に気付いて、智沙ちゃんが言う。会心の写真が撮れたせいか、その顔には、ここに来て初めて見るような明るい笑みが浮かんでいた。

「智沙ちゃんが、写真好きなんだ」

その笑顔につられるように、僕は訊いた。

「うん」

驚くほど素直な調子で返事をしてから——智沙ちゃんは、はっとしたような顔でこっちを振り返った。

「ど、どうだっていいでしょ！ そんなこと！」

「え……えと……」

「……行くわよ」

元のツンケンした態度に戻って、智沙ちゃんが、自転車を再び発進させる。

「な、なんなんだよ……」

僕は、口の中でそう言って、智沙ちゃんを再び追いかけた。

智沙ちゃんの家は、塀に囲まれた大きなお屋敷である。何でもここらへん一帯の地主さんらしい。門をくぐり、広い庭を横切って、外車が収まったガレージの中に自転車を置き、瓦葺きの大きな家の前に立つ。

作りはもちろん和風だけど、家自体は新しい感じだ。

「今日、みんな留守だから」

そう言って、智沙ちゃんは、ポケットからキーホルダーを取り出して玄関のカギを開けた。

「入って」

「うん……おじゃま、します」

僕の部屋くらいはありそうな石造りの玄関から、広い廊下に上がる。

「適当にスリッパ使って」

「う、うん」

自分の家や美保さんの家じゃあスリッパなんてはかないんだけど、さすがに、この家の中だとはかなくちゃいけないような気持ちになる。

僕は、家の奥へと案内された。

真新しい畳の香りと、かすかな線香の匂いが、ぷんと鼻につく。

「ここが、私の部屋」

そう言って智沙ちゃんが僕を通したのは、家全体の造りに反して、洋間だった。

床はフローリングで、壁や天井は淡いピンク色のクロス張りだ。

そして、壁には、大小さまざまなサイズに焼かれた写真が、きちんとした額に収まって飾られていた。

トンボやチョウなどの昆虫や、カモメやトンビと思しき鳥、名前の分からない草花などの写真の他に、この近くの海岸や山並みなんかを写した風景写真なんかもある。

「これ、みんな智沙ちゃんが撮ったの？」

「あ……うん」

バッグを床に置きながら、智沙ちゃんが答える。

「上手だね」

「……フ、フン。君に写真のことなんて分かるわけ？」

「そりゃあ、よく分からないけど……きれいだな、って思うもん。これ、南の岬？ ちょっと雰囲気違うけど」

「そうよ。冬の写真だけだね。今くらいの時期とは、海の色が違うの」

「へえ……そうなんだ……」

言いながら、僕は壁にかけられた写真を順々に見て——そして、それに気付いた。

ダッシュボードの上に置かれた、メガネ。

一目で女の子用と分かるデザインのそれは、しかし、レンズにヒビが入っていた。

見ると、つるの部分も微妙に歪んでるみたいだ。

「智沙ちゃん、メガネかけてたっけ？」

「前はね。今はコンタクトよ」

「じゃあ、これ何？」

と、智沙ちゃんは、僕がレンズの割れたメガネを指し示しているのに初めて気付いた様子で——怒ったように、顔を赤くさせた。

「何だっていいでしょっ！」

「……」

「だいたい、君、私がどうしてここに呼んだか、分かっているの？」

「それは……」

分からない。分かるわけがない。智沙ちゃんは、何もきちんと言わないんだから。

けど——

「君と、美保さんとのことよ」

智沙ちゃんは、あの言葉を繰り返した。

「どういう、こと……？」

「とぼけても無駄よ」

そう言って、智沙ちゃんが、再びキーホルダーを取り出して、今度は机の引き出しのカギを開ける。

そして、智沙ちゃんは、引き出しから数枚の写真を取り出し、僕に突き付けた。

「……っ！」

予想は、していた。

けど、それは、最悪の予想だった。

たぶん、プリンターでプリントアウトされたいらしい、葉書大の写真。

それは、窓の外から、僕と美保さんが裸で抱き合っているところを写したものだだった。

例の、台風の夜じゃない。でも、あれ以来、僕と美保さんは、つつい窓際でそういうきわどいことをしていたわけで……そして、カーテンが半開きだったのに気付いて、あわてて閉める、なんてのも一回や二回じゃなかったのである。

時間帯は、多分朝だ。夜、美保さんと裸のままベッドに入り……そして、そのまま目が覚めて……その時、やっぱりカーテンが開いてて……。

でも、どうして、こんなに早い時間に智沙ちゃんが？

「私、よく早起きして、このへんの写真を撮ってるの」

僕の心を読んだみたい、智沙ちゃんが言った。

「それで、美保さんの家の前を通りがかったら、美保さんと君がああいう格好をしていたのが見えたのよ。遠くて良く分からなかったけど、望遠レンズをのぞいたら……ってわけ」

「……………」

僕は、何も言うことができなかった。

無意識に、腕時計をまさぐる。

どうすればいいの、さっぱり分からない。

パニックになりそうだった。

「……何か、言うことないの？」

智沙ちゃんが、薄くほほ笑みながら、言う。

「ど……」

僕は、ようやく声を振り絞った。

「どうすれば、いいの……？」

「そうね……」

智沙ちゃんが、写真を口元に当てて、考え込む。

今、智沙ちゃんに飛びかかって、あの写真を奪い取ったら……。

けど、そうしたとしても、写真のデータはメモリに残されているはずだ。

そんなことをしても、どうにもならない。

それに、もし、智沙ちゃんが何か交換条件を出してくるんだとしたら……。

智沙ちゃんは、別に、僕と美保さんのことをただ責めるだけというつもりじゃないみたいだ。もし、智沙ちゃんが僕にできるようなことを要求してくるだけならば……。

でも、いったい何を？ お金？ 美保さんの家からお金を盗んで来いとか……？
もし……もしそうだったら、僕は……。

「脱いで」

と、不意に、智沙ちゃんが言った。

「え？」

智沙ちゃんの声は聞こえてたけど、その意味が取ることができず、僕は聞き返した。

「だから、服を脱いで、裸になって」

「な……！」

「この写真で、君がやってみたいにね」

智沙ちゃんが、手に持っている写真をひらひらと揺らす。

「……………」

「どうしたの？ 早くしなさいよ」

服を、脱ぐ……？

女の子の部屋で……智沙ちゃんの目の前で……裸に、なる、だって……？

「今さら、何を恥ずかしがってるのよ。私、君が裸になってる写真を持ってるのよ」

「け、けど……」

「それとも、これ、叔母さんに送っちゃおうか？」

「っ……！」

僕は、唇を噛んだ。

智沙ちゃんも、僕と同じように、美保さんのことは「美保さん」としか呼ばない。だから、智沙ちゃんが言う「叔母さん」ってのは、僕の母さんのことだ。

もし、母さんがあの写真を見たら……。

でも……どうして……どうして僕はいつもこんな目に……。

「どうするの？ 研兎君」

「わ、分かったよ……」

僕は、うつむきながら、答えた。

そして、指を、ボタンにかける。

情けないことに、指先がぶるぶると震えていた。

苦労して、一つ一つ、ワイシャツのボタンを外す。

そして、僕は、ワイシャツを脱ぎ、下に着ていたランニングも脱ぎ捨てた。

「……………」

スラックスのベルトに手をかけて、さすがにためらう。

「早く、そっちも脱いで」

智沙ちゃんが、ちょっと上ずったような声で、僕をせかす。

でも、僕には、智沙ちゃん表情をうかがうような余裕は無い。

ほとんどヤケで、ベルトを外し、スラックスを下ろした。

あとは、靴下とトランクスだけだ。

「ねえ、もう……」

僕の口から、思わず、弱々しい声が漏れる。

「だめ。パンツも脱ぐの。本当に叔母さんに送るわよ」

智沙ちゃんは、きっぱりとした口調で、そう言い放った。

「……………」

僕は、涙が出そうになるのをこらえながら、トランクスを脱いだ。

靴下だけの格好にさせられ、その屈辱に歯を食いしばりながら、両手で股間を隠す。

「手、どけて」

恐れていたとおりのことを、智沙ちゃんが言う。

僕は、手をどかし……手の平に爪が食い込むくらい強く、こぶしを握った。

「ふうん……」

ベッドに座ったまま、智沙ちゃんが、興味津々といった調子で身を乗り出す。

「ソレが付いてなきや、女の子みたいな体よね」

「そ……そんなことないよっ！」

コンプレックスの源泉を残酷に抉られ、僕は、反射的に声をあげた。

「そんなことあるわよ。君、顔も女の子みただし、チビだし、肌も白いしさ……」

「うっ……」

どうして……どうしてなんだろう……どうして僕の外見はこんなで……そして、それを人はいつも笑うんだろう……。

学校でだってそうだった。何度、女の子だというだけで、クラスの連中にひどいことをされたろう。

どうして……。

「……いいこと考えたわ」

僕の気持ちなど知らぬげに、智沙ちゃんがそう言って、立ち上がる。

そして、床に落ちたままの僕のスラックスからベルトを引き抜いた。

「後ろ向いて、手を背中で組んで」

「え……？」

「キレて暴れられたら困るから、縛っちゃうわ」

「そんな……！」

「ほら、言うとおりにしてよ」

「……………」

僕は、言われるままに、後ろを向いて、左右の手で反対側の手首をつかむようにして、手を組んだ。

智沙ちゃんが、僕の手にもベルトを巻き付ける。

「はい、いいわ。こっち向いて」

「……………」

僕は、精一杯目に力を込めて、智沙ちゃんをにらんだ。

智沙ちゃんが、吊り気味の目で僕の視線を受け止めながら、再びベッドに座る。

そして……驚いたことに、いきなり自分のスカートの中に手を差し込んだ。

「……………！」

僕がびっくりしてるうちに、智沙ちゃんが、するするとショーツを脱いでしまう。

小さく丸まった可愛いブルーの布切れを、ぽん、と智沙ちゃんがシートの上に投げ出した。

「……舐めて」

顔を赤くしながら、反対に僕をにらみつけ、智沙ちゃんが言う。

「なっ……って、どこを……」

「……決まってるでしょ。ここよ」

そう言って、智沙ちゃんは、スカートをまくり上げた。

ぎくつとするくらいに、真っ白い智沙ちゃんの脚。

その付け根で、美保さんのそれに比べるとあまりにもささやかなヘアが、股間を飾っている。

「は……早くしてよ。そこに座って！」

「う、ん……」

僕は、思わずうなずいて、ちょっとよろけながら、智沙ちゃんの足元に正座してしまった。

「……………」

智沙ちゃんが、無言で脚を開き、ベッドの上で腰を前にずらした。

スカートの布地を握るこぶしが、少し、震えてるように思える。

(う……わ……)

何の心構えも無い状態で見せられた、智沙ちゃんのそこ。

それは、ぱっと見には、単なる縦一筋のワレメだったけど……よく見ると、ピンク色のヒダがかすかにのぞいていて……そして、少し、濡れているようにさえ思えた。

「じ、じっと見てないで、さっさとしなさいよっ！」

怒ったような声で言って、智沙ちゃんは、僕の頭を両手でアソコに押し当てた。

「んぷっ……！」

美保さんのそれと似てるようで違う、ちょっと甘酸っぱいような不思議な匂い。

僕は、口元に柔らかな感触を感じ、美保さんに何度もしたように、まずは舌でまさぐった。

「あ……んっ……」

智沙ちゃんが、かすかに声を漏らす。

僕は、舌に力を込め、智沙ちゃんのワレメの奥を舐め上げた。

舌に感じる、独特の味——

目を閉じ、舌先に神経を集中しながら、さらに智沙ちゃんのアソコを舐める。

「は、ふっ……ん……あ……んんっ……」

智沙ちゃんが、少しだけ、感じた声をあげる。

そうやって声を出させることが、両手を拘束された僕にできる唯一の抵抗のように、なぜか思え

た。

舌の動きを次第に速めながら、智沙ちゃんの敏感な部分を、探っていく。

「はっ……んんっ……あう……は、はふ……あ……あんっ……」

僕にいろいろとひどいことをしている子なのに——智沙ちゃんの声、どうしても可愛いと思ってしまう。

その声をもっと聞きたいという気持ち、そんどん高まっていくのを、僕は感じていた。

羞恥と屈辱と興奮が混ざり合い、ぐつぐつと煮えたって、頭の中を満たしていく。

「あんっ！」

そして僕は、とうとう、そこ——クリトリスを探り当てた。

「あ、あんっ！ あっ！ あん！ ああっ！ あんんツ……！」

智沙ちゃんの声が高くなり、じんじんと熱くうづく僕の脳と共鳴する。

僕は、今や夢中になって、智沙ちゃんの快楽を高めるべく、舌と唇を使っていた。

クリトリスをぴたぴたと舌で叩くように弾き、ちゅばちゅばと唇で断続的に吸引する。

「ああんっ……！ う、うそっ……こんな……あんっ、ああんっ……あーっ！」

智沙ちゃんは、うろたえたような喘ぎ声をあげながら、髪を振り乱すように首を横に振っている。

息苦しくて荒くなっていた僕の息が、いつしか、興奮のために荒くなっていた。

「うっ、くうんっ……ハア、ハア、ハア……んくっ……んんんんんんんツ！」

「んっ……！」

突然、腰に甘い電気が走る。

自分の口と、智沙ちゃんのアソコにだけ集中していた僕は、びくん、と体を震わせてしまった。

智沙ちゃんの右足が——僕の肉棒を、強く圧迫している。

そして、僕は——

「はあっ、はあっ、はあっ……うふふ……研児君、勃起してるじゃない……」

智沙ちゃんの言うとおり、僕のそれは、まだ触れられてもいないうちから、固くなって上を向いてしまっていた。

「私のを舐めて、興奮しちゃったの……？ やらしい」

言いながら、智沙ちゃんが、靴下をはいたままの足で、僕のペニスの先っぽをぐりぐりと撫でる。

「あうっ……」

「すごい……ぬるぬるしてる……アソコみたいに濡れてるわ……」

「う、あっ、ああっ、だ、だめエ……」

「んふ……声も女の子みたい……」

そう言いながら、智沙ちゃんが、上向きになっていた僕の顔をアソコに押し付けた。

「んむっ……」

「ほら、休まないでよ……ここ、足でしてあげるから、もっと舐めて……！」

「うっ、ううっ、んっ……」

僕は、まるで快楽を与えてほしいがためにそうしているように、口による愛撫を再開させた。

「んっ、そ、そう……はあっ……ご褒美ほしいんだ……ふふふ……」

智沙ちゃんが、妖しい笑みを漏らしながら、ソックスの布地で包まれた足指で、僕の肉棒をこする。

乱暴で、粗雑な、愛撫とも言えないような愛撫……。

それでも僕は、しっかりと快感を感じてしまい、さらなる先汁を溢れさせてしまった。

再び、形勢が逆転している。

「ふっ、ふっ、ふっ、ふっ……」

「んふふっ……あ、ああん……ああ……まるで、研児君をペットにしちゃったみたい……はあん……っ！」

どぷっ、とびっくりするくらいの量の蜜が、僕の口を濡らす。

まるで、踏み潰すような乱暴な動きで、僕のペニスを攻め立てる智沙ちゃんの足。

イキたくても、これじゃイクことなんてできない。

僕は、両手を自由にしようと、ベルトがギシギシと音を立てるくらい強く、腕を左右に引いていた。

「感じてるんだ、研児君……」

智沙ちゃんの上ずった声に、あの優越感がにじんでいる。

人を虐げ、貶め、翳っている人間特有の、神経を逆なでするような……。

「君……いじめられて悦んでるの？」

そんな……そんな……そんな……。

そんなわけ……。

「そんなわけないだろっ！」

そう言って、僕は、思い切り腕を引き——ベルトを弾き飛ばしていた。

「え……！」

驚く智沙ちゃんに、反射的に飛びかかり、のしかかる。

「ど、どうして……キャッ」

智沙ちゃんが驚くのも無理は無い。うんときつくベルトを締めていたつもりだったんだろうから。

でも、僕は、両手を後ろに回した時、わざと腕と腕の間に透き間を作っておいたのだ。

さらには、右手で、左手の腕時計を外し、その分だけさらにスペースを作った。

それもあって、汗に濡れた僕の腕は、ベルトによる拘束から脱出することができたのである。

「やっ、や……やああっ！」

両手を僕によってシーツの上に押さえ付けられ、智沙ちゃんは悲鳴をあげる。

腕時計が外れているので、智沙ちゃんの右手を押さえ込んでいる僕の左手の手首の傷は、あらわになっている。

僕は——もう、すっかり頭に血が昇っていた。

「ちょ、ちょっと、やめてっ！ ときなさいよ！ 何する気っ？」

あくまで勝気な智沙ちゃんの物言いが、僕の危険な衝動をさらに煽る。

僕は——しどけなく開かれた智沙ちゃんの脚の間に強引に腰を割り込ませ、まくれあがったスカ

ートの中心にあるクレヴァスにペニスを近付けていった。

「や、やだ……！ やめなさい！ 君、自分が何をやってるか分かってるの？」

もちろん——知るもんかっ！

智沙ちゃんの体に覆いかぶさり、腰を腰にこすりつけるようにして、肉棒を繰り出す。

「やあああっ！ やめて、やめてっ！ ちょっと待ってっばっ！」

二度、三度、いきり立った肉棒が、さっきまでの愛撫で愛液と唾液にまみれた肉襞を浅く抉る。

そして——

「あ、ああっ……ねえっ！ 本当に……！」

ずるんっ。

「いたあああああああああっ！」

その、あまりに悲痛な声で、一瞬だけ、理性が戻った。

勃起したペニスを、熱くてぬるぬるする強い圧力が、包み込んでいる。

「バ……バカっ！ バカあつ！ は、早く……早く抜いて……！」

苦痛にたわむ眉。涙に濡れる瞳。

それを見つめながら、僕は、目がくらむような衝動に突き飛ばされ、さらに腰を突き込んだ。

ずずずずずっ！

「んあああああああああっ！」

智沙ちゃんの、悲鳴。

それが、なぜか、ゾクゾクと背中を震わせる。

これまで美保さんと共有してきた、体がとろけてしまいそうな快楽とは全く違う、鋭く、危険で、切羽詰まった快感。

僕は、そのまま、ぐいぐいと腰を動かしていた。

「やあっ！ やめっ……やめてえっ！ いた……いたいっ！ いたい！ いたい！ いたいっ！」

ぎゅっ、ぎゅっ、と僕を拒むように締め付けてくる智沙ちゃんのアソコ。

皮肉にも、それが、僕の快感をさらに煽り、ますます激しい抽送を誘ってしまう。

「いっ！ いひいっ！ や、やめ……ひいっ！ あっ、くっ、イ、イタイ……イタ……アアアアアアアア！」

悶え、うねる智沙ちゃんの体を捕まえたままでいようと、その華奢な体を抱き締める。

僕の腕から抜け出た智沙ちゃんの手が、僕の背中に爪を立て、かきむしった。

鮮烈な痛みと、強烈な快感が、ますます僕を駆り立てる。

「あうっ……く、ひっ……！ んっ……！ あぐっ……ひ、く……ああああっ……！」

いつしか濡れ始める、智沙ちゃんのアソコの中。いつしか濡れ始める、智沙ちゃんの喘ぎ声。

次第に滑らかになっていく膣内を、抉り、掻きむしるように、僕のペニスの雁首がこすり続ける。

シャフトに、肉襞と、鮮血と、愛液が絡み付き、たまらない快感をもたらす。

「バカ……バカっ……！ あ、あう……ひ……ひんっ……ひいっ……ひ……ひあああああああ……！」

すでにペニスは智沙ちゃんのアソコから抜けていて、そこからは、どろりと血の混じった精液が溢れ出ている。

「う……」

智沙ちゃんは、ちょっと僕をにらみつけてから、ごしごしとこぶしで涙を拭った。

「ひどいなあ、研児君……」

そう言う智沙ちゃんの声は、こっちが意外に思うほどに、しっかりとしていた。

大声をあげたせいか、かすれてはいるけど、泣き声じゃないし……怒った声ですらない。

それどころか……智沙ちゃんの声には、この事態をちょっとだけ面白がってるような響きさえ感じられた。

「え、えと……」

僕は、謝るべきなのか怒るべきなのか迷ってしまい……そして、どちらもできなかった。

「私、初めてだったのに……」

智沙ちゃんが、服の乱れを直しながら、言う。

そう。僕は、処女だった智沙ちゃんをレイプしてしまったのだ。

しかも、智沙ちゃんは、僕の致命的な弱みを握っているって言うのに……。

いや、そういうことじゃなくて、暴力で女の子を犯すなんて、それは、絶対にしちゃいけないことのはずだ。

けど、それは、もともとは智沙ちゃんが僕を脅迫したからだし……そもそも無理やりにアソコを舐めさせるなんて行為そのものがある意味でレイプと同じかもしれなくて……だけどやっぱり……。

「これで、おあいこよ」

と、僕の悩みをすっぱりと切り捨てるように、智沙ちゃんは言った。

「え……？」

そ……そうなんだろうか？

いや、でも、だって、そもそもは……。

と、いきなり、智沙ちゃんは、くすつと笑った。

さっき、道でトンボの写真を撮ったあとに見せた笑顔に似てるけど、なんて言うか、それよりももっと子供っぽい表情。

それは……小さいころの思い出の中で、幼い智沙ちゃんが浮かべていた、屈託の無い笑みだった。

「お人好しだよね、研児ちゃんって」

智沙ちゃんが、そんなふうにする。

外では、セミが、うるさいくらいに鳴いていた。

第五章
—夏の色—

胸の中にわだかまりを抱えたまま、何日かを過ごした。

小説を読んででも、目が字の上を滑って、内容がぜんぜん頭に入らない。

——智沙ちゃんと、セックスしてしまった。

まだ、中学生同士なのに。

そりゃあ、美保さんとするのが何の問題も無いかって言うと、そういうわけじゃないと思うけど……。

そもそも、僕と智沙ちゃんは、単なる幼なじみ同士だったわけで、少なくとも僕は、智沙ちゃんをそういう対象には見ていなかった。

僕は、美保さんが好きだし、美保さんとああいう関係になった以上、他の人とセックスするのは何かの裏切りのように思えてしまう。

智沙ちゃんは……どうなんだろう？

智沙ちゃんは、いったいどういうつもりで、僕をハダカにして、アソコを舐めさせたりしたんだろう？

いや、それを言うんだったら……。

ぴんぽーん。

また、ドアのチャイムがなった。

昼下がり。美保さんは、仕事に出かけてしまっている。

「……………」

僕は、胸騒ぎを覚えながら、ドアを開けた。

「……こんにちは」

思った通りと言うか何と言うか……そこにいたのは、智沙ちゃんだった。

「美保さんなら、もう仕事だよ」

「うん、分かってる」

僕の言葉に、智沙ちゃんが言う。

智沙ちゃんの顔には、表情らしい表情は浮かんでいない。

ただ、あえて言うなら、なんだか緊張してるみたいな感じだった。

「僕に、また話があるわけ？」

「うん、そうなんだけど……」

口ごもりながら、智沙ちゃんは、顔を赤らめた。

「……上がる？」

「うん……」

僕の言葉に、ほっとしたように、智沙ちゃんがうなずいた。

「で、話って何？」

僕は、智沙ちゃんに麦茶を出してあげてから、訊いた。

なんだかつっけんどんな言い方になってしまったかもしれない、と反省しつつも、やっぱり、智沙ちゃんに対する警戒感は消えてるわけじゃない。

「ん……えっと……どうやって切り出したらいいかな……」

智沙ちゃんは、珍しくはっきりしない口振りで、視線をさまよわせた。

そして、その目を、僕の左手に向ける。

僕は、腕時計をいじるのをやめ、左手をちゃぶ台の下に引っ込めた。

「その——」

「僕の手首の傷のこと？」

「う——うん。その……ちょっと、気になって……」

「そっか……智沙ちゃんは知らないんだよね」

それはそうだ。この傷のことを知っているのは、僕の家族と、あとは美保さんだけのはずなんだから。

要するに、智沙ちゃんは、僕とセックスをしたあの時、初めて、僕の傷を見たわけだ。

「あ、あの……もし話しづらいことだったら……」

「いいよ、話すよ」

僕は、智沙ちゃんの言葉を遮って、それから麦茶を飲んで喉を湿らせた。

智沙ちゃんに話してどうなるものかとも思うけど……でも、平気な顔であることを話せるかどうか、自分でも確かめてみたかったのだ。

「僕が、小学校五年のころから不登校なのは、知ってるよね？」

こく、と智沙ちゃんが、無言でうなずく。

「その理由については、何か伯母さんから聞いている？」

今度は、智沙ちゃんは首を左右に振る。

なるほど……じゃあ、一から話す方がいいかな……。

「僕……あのころ、イジメにあってたんだ」

「えっ……？」

驚いた顔を、智沙ちゃんがする。

「あれ……？ そんなに意外かな？」

「だ、だって……君、そんなふうになんも見えなかったから……」

「そう？ ——ん、まあ、確かに今は、そんなに悩んだりいじけたりはしてないけどさ」

でも、ここまで来るのに、それなりにこっちもいろいろあったのだ。

僕は、一呼吸おいてから、話を続けた。

「小学生のころは、けっこうキツくてさ……クラスの中で、体のでかい奴らに目を付けられて、いろいろされたんだ」

「どうして？」

「そりゃあ……僕が、体が小さくて、いじめやすかったからだと思うよ」

僕は、少し言葉を選んで言った。

実際は、はっきりと口で“女みたいだから”と言われたんだけど……。

「それで、不登校になったの？」

「ん、まあ、自分ではけっこう頑張ったつもりだったんだけどね。でも、先生とかもイジメやってる方の味方みたいでさ。単に、ふざけあってるのの延長みたいに思われたみたい」

「……いろいろ、されたの？」

「ん、まあね」

「どんなこと？」

そう訊いてから、智沙ちゃんが、しまった、という顔をする。

けど、僕は、自分がもう平気なんだってことを示すために、言葉を続けた。

「別に、殴られたり蹴られたりはなかったよ。けど、着替えを隠されたり、トイレで水かけられたり……それから、みんなの前で服を脱がされたりとか……」

あ、これは言わない方がよかったかな？

「……………」

智沙ちゃんが、難しい顔をして黙っている。

「ま、とにかく、限界が来ちゃって、僕は不登校になっちゃったわけ。で、中学校になったら平気かなと思ったんだけど……やっぱ駄目だった」

「その……研児君をいじめたやつらがいたの？」

「いや、そういうわけじゃなかったけど……また、誰かに同じようなことをされるんじゃないかって恐かったんだよ。で、やっぱり学校に行けなくなっちゃって……」

「……………」

「父さんや母さんも、もうイジメにあってるわけじゃないのに学校行かない僕が、単にサボってるんだって思ってるみたいでさ……で、その時は、もう、自分が周りにすごい迷惑をかけてるみたいな気がして、ずーっと引き籠もったままでね……それで……」

「それで……？」

「うん、やっちゃった。まあ、傷はぜんぜん浅くて、生きるの死ぬのって話にはならなかったんだけどね」

貧血状態から目を覚ました僕に、母さんは、まずこう言った。

——どうしてあなたはそうやって迷惑ばかりかけるの！

その時、ようやく、僕はふっ切れたのだ。

生きてても死のうとしても迷惑をかけるだけなら、別に死ぬことはないんだ、と。

そういうわけで、僕は、開き直ってしまった。

そのころから、ネットを始めて、いろいろな人と話しをして、不登校児学級の方にも通うようになった。

もし、今の僕が普通の中学生のように見えるんだったら、それは、不登校の自分というものを受け入れてしまったからだろう。

「とまあ、そういうこと。どう？ 好奇心は満足した？」

「わ、私そういうつもりじゃ——！」

僕の皮肉に智沙ちゃんは大声を出しかけ、そして——いきなり両腕で顔を隠した。

「え？ ち、智沙ちゃん？」

「うっ……わ、わた……ごめ……うえっ……ええええええええええええええええ……」

な？

泣いてる？

智沙ちゃんは、ボロボロと涙をこぼしながら、顔を真っ赤にして泣いていた。

そして、その様子を見られまいとするように、両腕を交差させるような感じで顔を覆っている。

「あ、あのさ……えっと……」

「ごめ……ごめんなさいっ……！ わ、わた、わたし……ずっと……君が……そんなだったなんて……ええっ、えっ、ええええええ……」

智沙ちゃんが、嗚咽混じりの声で、言う。

「ずっと、君……学校サボってるんだって……ふ、不良になっちゃったんだって……そう思って……なんか、それがイヤで……悔しくて……」

「ふ、不良……？」

いやまあ確かに、きちんと学校に行っていないわけだから、そういうことにもなるかもしれないけど……。

「しっ……知らなかった……私……でも、でも、セックスしたあと、なんか、昔の研児ちゃんみたいだったから……あとから、傷のことがすごく気になって……その……だから……」

「ん、分かったよ。だから泣かないで」

「でっ、でも、でも……私……研児ちゃんにひどいことして……」

「……あ、あれは……えーと……おあいこだったんでしょ？」

まだ、自分自身で整理がついてるわけじゃないけど、そう言ってみる。

「で、でも……」

「おあいこでいいから……僕、もう、気にしないからさ。だから、そんなに泣かないで？」

「だ、だけど……私っ……研児ちゃんのこと……」

そう言って、智沙ちゃんは、ムリヤリみたいに声を止めた。

そして、腕で顔を隠したまま、えっく、えっく、と何度かしゃくり上げる。

「……智沙ちゃん、何か言った？」

「ティッシュ」

「は？」

「お願い、ティッシュ貸して。それから、ちょっとこっち見ないで」

まだちょっと鼻声で、それでも普段どおりの口調で、智沙ちゃんが言う。

「……はい」

僕は、ティッシュを箱ごと智沙ちゃんの前において、それから視線を向こうにそらした。

「……ありがと」

智沙ちゃんのお礼の言葉に続いて、びーっ、と鼻をかむ音が響く。

何回かその音が聞こえてから、智沙ちゃんが、ごみ箱にティッシュを捨てる気配があった。

「もういい？」

「……うん」

そう返事をもらい、僕は、智沙ちゃんに向き直った。

智沙ちゃんが、顔を真っ赤にして、こっちをにらむみたいに見ている。

その瞳は、まだ涙でうるうるしてて……奇妙なくらいに可愛く見えた。

「研兎君」

「な、なに？」

なんだか切羽詰まった感じの声に、僕は、ちょっと慌ててしまう。

「私、君のことが好き」

「……はあ？」

「そんな声出さないで！ 好きなの！ ずっと好きだったの！」

まるで、いたずらをした小さい子を叱るような口調で、智沙ちゃんが言う。

「小学生のころ、君が来てくれた時、すごく楽しかった……夏が来るたびに、早く君に会いたいと思ったわ」

「……………」

「君は……研兎君は、ぜんぜん私のこと、女に見てないんだってことは分かった。二人とも小さかったもんね。それに……君が、美保さんのこと好きなんだってことも知ってたし……」

「それは……」

「でも、もっと大きくなったら、って……ずっとそう思ってたの」

「……………」

「だけど君は、いきなりこっちに来なくなって……せっかく私……その……少しは女らしくなったのに……」

「……………」

「いろいろ相談したいこともあった……聞いてくれるだけでもいいと思ってた……けど、君は来てくれなくて……私の悩みを聞いてくれたのは、たまにこっちに帰ってくる美保さんだけだった……」

智沙ちゃんの声が、だんだんと泣き声に近くなる。

「だから、私……美保さんも好きだった……離婚して、こっちにずっといてくれるようになってからは、

もっと好きになったわ……なのに、君も、美保さんも、あんなふうになって……私だけ、なんだか仲間外れで……」

「智沙、ちゃん……」

「お願い、研兎君……私と……して……」

どきり、と心臓が跳ねる。

じつと唇を結び、目を潤ませ、頬を真っ赤にしながら、智沙ちゃんがこつちを真正面からにらんでいる。

「君が……研兎君が、私のこと、好きでなくてもいい……嫌いでもいいから……抱いて……もう一回、してほしいの」

「でも……」

「お願い……怒ってない君に、抱いてほしい……」

智沙ちゃんが、僕と、そして自分自身を追い詰めていく。

このままだと……また、智沙ちゃんは泣いてしまうだろう。

もう、智沙ちゃんが泣くのは見たくない。それが、僕のせいで泣くんだっつらなおさらだ。

そういう理由で、智沙ちゃんとするのは……やっぱりいけないことだろうか……？

僕は……やっぱり、美保さんのことが好きなんだし……。

でも……。

「うん、分かったよ……」

僕は、智沙ちゃんに向かって、そうやってしまったのだった。

「研兎君……やっぱり、怒ってる？」

僕が使ってる部屋に入ってから、智沙ちゃんが、言った。

「え……？ ううん。怒ってはいないけど」

カーテンを閉めながら、僕が答える。

「よかった……」

心底ほっとしたように、智沙ちゃんは言った。

「……………」

僕は、智沙ちゃんと向き合った。

学校の夏服できゃしゃな体を包んだ、ちょっとだけキツイ目をした女の子。

僕の、幼なじみ。

そして——僕を、好きだと言ってくれたひと。

「脱ぐね」

言って、智沙ちゃんは、セーラー服を脱ぎ始めた。

指が、震えている。

僕は、そんな智沙ちゃんの様子を、何を言うでもなく、ただ、見つめてしまっていた。

次第に、智沙ちゃんの日焼けしていない肌があらわになっていく。

「私……美保さんみたいに、おっぱい、おつきくないけど……」

そう言いながら、智沙ちゃんは、ブラを外した。

「見て……」

「んっ……」

僕は、返事をする代わりに生唾を飲み込んでしまった。

そして、智沙ちゃんの白い乳房に、顔を近付ける。

「さ……触って……もし、いやじゃなかったら……」

「い、いやなわけ、ないよ」

僕はそう言って、智沙ちゃんのオツパイに、指先で触れた。

「うん……」

智沙ちゃんが、可愛い声を漏らす。

「もっと……」

「うん……」

もう、止まらない。

僕は、智沙ちゃんの両方の胸に左右の手でそれぞれ重ね、包み込むようにして、次第に力を込めていった。

少しずつ、少しずつ、手を大胆に動かして、智沙ちゃんのオツパイを揉む。

「う、うっ……あふ……あうっ……んんっ……」

智沙ちゃんが、肩をすくめるようにして、軽く身をよじる。

「くすぐったい？」

「うん、少し……でも、もっとしてほしい……」

はあ、はあ、とあえぎ声を漏らしながら、智沙ちゃんが言う。

僕は、智沙ちゃんのオツパイを揉み、乳首の周辺を指で撫でた。

そして、左右のピンク色の乳首を、ころころと指先で転がす。

「うっ、んんんっ……あふ……くうんっ……せ、切ないよ……」

「智沙ちゃん……」

僕は、ふるふると震える智沙ちゃんの胸元に、唇を近付けた。

そして、もう固くなっちゃってる乳首を、口に含む。

「あうんっ……！」

智沙ちゃんが、甘い声を漏らす。

僕は、智沙ちゃんの乳首をできるだけ優しく吸ってから、ねろねろと舐めしゃぶった。

左右の乳首を交互に口に啜え、空いている方は指で摘まんで、くいつ、くいつ、と軽く引っ張る。

「うんっ、あ、あうんっ……ダ、ダメえ……立ってられない……」

体をふらつかせながら、智沙ちゃんがそう訴える。

僕は、ちゅぽん、と乳首から唇を離した。

「じゃあ、ベッドに……」

「うん……」

ショーツと白い靴下だけを身に付けた智沙ちゃんの体を、ベッドに横たえる。

「脱がすね」

「うん……」

智沙ちゃんの返事を待って、その小さなお尻から、ショーツを取り去る。

いつの間にか……僕の方が、主導権を握っていた。

智沙ちゃんの脚の間に体を置き、すでに濡れ始めている割れ目に、顔を寄せる。

「あ、ダメ……」

「どうして？」

「だ、だって……まだ、シャワーとか浴びてない……」

この前は、いきなり舐めさせたくせに……と、一瞬だけ思う。

「気にしないで」

僕は、そう言って、智沙ちゃんの割れ目にキスをした。

「ああっ……研児君……あ、あの時は、私っ……」

自分が僕にした仕打ちを思い出したのか、智沙ちゃんが何かを言いかける。

「だから……そのことも、気にしないでいいよ」

そう言って、僕は、智沙ちゃんの手を遮るように、クニニを始めた。

両手で小ぶりなお尻を捧げ持つようにしながら、クレヴァスの奥へと舌を侵入させ、上下に動かす。

「あうっ、うっ、うくっ……ああっ……け、研児君っ……！ あくうんっ！」

可愛い、智沙ちゃんのあえぎ声。

その声と、美保さんのとろけそうな声を、無意識のうちに、心の中で比べてしまう。

声だけじゃない——お尻の大きさも、アソコの形も、愛液の味や匂いすらも、美保さんと智沙ちゃんは違っている。

(だめだ、そんなこと考えちゃ……！)

現在進行形で“浮気”をしながら、僕は、そんなふうに分人に言い聞かせた。

それは、ただ単にいろいろな罪悪感を忘れたかったからかもしれないけど……。

ともかく、僕は、自分の唇と舌に神経を集中させ、クニリングスに没頭した。

「あん、あくうんっ、あう……あん、ああん、あああっ……！ す、すごい……あひいんっ！」

まるで、汲めども尽きぬ泉のように、智沙ちゃんのアソコから愛液が溢れ続ける。

僕は、それを夢中になって舐め啜りながら、勃起しているクリトリスにも舌を這わせた。

「ひいいんっ！ あひっ！ そ、それ……強すぎっ……くうんっ！」

「あ……痛かった？」

「い、痛くないけど……なんか、すごすぎて、こわい……ああんっ！」

苦痛を感じてるわけじゃないんだと知って、クリへの愛撫を再開させる。

「あつ、ああああん、やあんっ……研児君、イジワルだよっ……ひあああつ！」

僕をなじりながらも、まるで甘えるような、智沙ちゃんの声。

僕は、もう、たまらなくなった。

「ち、智沙ちゃん……」

僕は、余裕なくベルトを外し、トランクスごとズボンを脱ぎながら、智沙ちゃんの華奢な体にのしかかった。

「研児君……」

ぎゅっ、と下から智沙ちゃんが僕の首に腕を回す。

「お願い……だ、抱っこして……」

顔を真っ赤にして、震える声で、智沙ちゃんがおねだりする。

「うん……」

僕は、智沙ちゃんの体を起こしてから、その細い肢体を抱き締めた。

僕があぐらをかいて、僕の腰を、智沙ちゃんが両方の膝で挟むような格好だ。

「このまま……抱っこしながら……して……」

「分かった……腰、こっちに……」

「うん……え、えっと、こう？」

僕に誘導されるままに、智沙ちゃんが腰を浮かす。

熱い肉のぬかるみが、くちゅ、と僕の肉棒の先端に触れた。

「あ……ここ？」

「うん、そう……」

そう答えながら、智沙ちゃんの腰を落としていく。

丸い亀頭部が濡れた割れ目を割り開き、奥へ奥へと侵入していく。

「んっ、んくっ……んあ……あ、う……くふううう……」

きつい膣道を広げるようにして挿入を続けると、智沙ちゃんが、不思議なため息を漏らす。

ずりずりと、肉竿が膣壁をこする感触。

そして、先端が、一番奥に到達した。

「あくうんっ……あああつ……す、すごいっ……はひっ……ひうううう……」

少し苦しげな声で、智沙ちゃんが喘ぐ。

「きつい？」

「う、ううん……平気……はふ……ふっ……あふ……くふう……」

智沙ちゃんが、呼吸を整えようとしている。

鮮烈な熱と圧力が肉棒を包み込んでいるのを、僕は、感じていた。

このままでもすごく気持ちいいけど、やっぱり、このままでいることはガマンできない。

僕は、智沙ちゃんのお尻に手を添えて、小さく上下に動かした。

「あ、あんっ……あ……あう……うん……ううんっ……」

すぐ耳元で、智沙ちゃんの濡れた喘ぎ声が、響く。

「研児、くんっ……あうんっ……あふ……あん……ああん……き、きもちいいよ……」

「僕も……きもちいい……」

思わず、僕はそう答えていた。

「う……うれしい……うれしいよ、研児君……んくっ、んっ、んんんっ……」

いつのまにか、智沙ちゃんは、自分から腰を動かしていた。

白くて華奢な体が、僕の腰の上で、リズムカルに跳ねている。

「研児、くん……」

僕の首に腕を回したまま、智沙ちゃんが、僕の顔を真正面から見つめる。

「好き……好きだよ……私……君のことが、好き……」

その言葉が、奇妙な軽い痛みとなって胸を抉り——それを、僕は快感として感じてしまう。

「あん、ああんっ……ずっと……こうなりたかった……こうしたかったの……研児君……研児君っ……」

「智沙、ちゃん……」

僕は、智沙ちゃんの唇に、唇を重ねた。

智沙ちゃんの言葉を遮りたかったのか——胸の中で大きくなる切なさをどうにかしたかったのか——それとも、ただ単にこの柔らかな桜色の唇をむさぼりたかったのか。

「んっ、んふっ、ちゅ、ちゅむ……んっ、んふっ、ふん……ふん、ふうん、んふうう……」

僕たちは、甘い息を鼻から漏らし、ぴちゃぴちゃと舌を絡めながら、夢中になってキスをした。

温かいような、くすぐったいような、淡い快感が、舌と唇をとろけさせる。

「んっ、ちゅ、ちゅむ、ちゅっ……はあ、はあ、はあ……研児君……好き……」

「智沙ちゃん……」

智沙ちゃんが、同じ言葉を僕に求めていることは、分かっていた。

けど、僕は、それを口にするのができず、ごまかすようにキスを続けている。

それでも、僕は、今この瞬間も、僕自身の気持ちと——そして、美保さんを裏切ってるのだ。

「あん、ああんっ……あはあっ……すごい……すごく気持ちいいの……あん、あああっ、あうんっ……」

高まる欲望。高まる快樂。高まる鼓動。高まる感情。

これ以上はないというほどにいきり立ったペニスを、智沙ちゃんのクレヴァスから溢れる愛液が濡らしている。

圧倒的な快感が、胸をさいなむ罪悪感を押し流しかけ、そのことがさらに罪悪感を育てる。

「ねえっ、わ、私……私、へん……へんになっちゃう……へんになっちゃうよっ……！」

声を高くしながら、さらに激しく腰を動かす智沙ちゃんを、下から固い肉棒で突き上げる。

「あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ……！ ダメ！ ダメっ！ わ、私——あああああああっ！」

せわしない喘ぎ。切羽詰まった声。

二人の肌は汗に濡れ、僕の胸を、勃起しきった智沙ちゃんの乳首がこすっている。

第六章
—夏の夢—

「どういう、こと……？」

小さな、聞き取れないような、美保さんの声。

「美保さん——」

僕は、智沙ちゃんを抱き締めていた腕をほどもき、何か言おうとした。

何を言っているかわからず、何を言うべきかなんて見当もつかない。

開いた口から、あらぬ言葉が迸りそうになる。

「違うの！」

僕が何か言う前に、智沙ちゃんが、叫ぶように言っていた。

「私が……私が研児君を誘惑したの……！ 研児君は悪くないわ！」

「……智沙ちゃんが？」

美保さんが、智沙ちゃんに聞き返す。

「ええ……だ、だから……その……研児君は、美保さんを裏切るようなことは……」

「……ま、待ってよ智沙ちゃん！」

僕は、慌てて声をあげた。

まだ、自分が何を言うべきかは分かっていたけど、とにかく、智沙ちゃんだけが全てを被るなんて事は、正しくない。

「ちょっと、ちょっと待って！ そんなふうに、自分だけ悪者みたいに……」

「君は黙ってて！」

ぴしゃり、と智沙ちゃんが僕の言葉を断ち切る。

「う……」

「君は年下なんだから、こういう時に出しゃばらなくていいのよ！」

「なっ……！」

智沙ちゃんの物言いに、僕は絶句してしまう。

さっきまで僕の腕の中にいた智沙ちゃんとのギャップに、僕は、わけが分からなくなりそうだ。

「智沙ちゃん——」

と、美保さんが、はっとするくらいに厳しい声で言った。

まだ僕に何か言いそうだった智沙ちゃんが、口をつぐむ。

「だめよ、好きな子にそんな口をきいちゃ……」

「わ、私は……」

「……研児君のこと、好きなんでしょう？」

いつもの柔らかな声に戻して、美保さんが訊く。

「……………」

智沙ちゃんは、顔を赤くして、うつむいてしまった。

美保さんは、その顔に、あるかなしかのほほ笑みを浮かべ、腕を組んだ。

「智沙ちゃんは、あたしと研ちゃんのこと、知ってたのね？」

「そ、それは……………」

「どこまで知ってるのかどうかは分からないけど……………あたし、研ちゃんと、寝たわ」

美保さんが、まっすぐに智沙ちゃんの顔を見つめながら、言う。

「それなのに、智沙ちゃんは、そんなふうな態度のままにいるの？ もっと素直にならなきゃ」

「わ……………私は……………！」

ぎゅっ、と智沙ちゃんが、小さなこぶしを握りしめる。

「私は、そんなふうには余裕ないもんっ……………！ 美保さんとは違うんだからっ……………！」

「……………」

美保さんが、どこか悲しそうな目で、智沙ちゃんを見る。

「あたしだって……………余裕があるわけじゃないんだけどね……………」

そう、小さな声で言いながら、美保さんは、組んでいた腕をほどき、僕たちが乗ったままのベッドに近付いた。

「私……………私は……………でも……………美保さんだって、嫌いになれない……………美保さんのことも、好きなんだから……………」

智沙ちゃんが、泣きそうな声で、言う。

「だったら、これから、あたしが研ちゃんを独り占めしていいの？」

「それは……………」

口ごもる智沙ちゃんと、さっきから何も言えないでいる僕を、美保さんは、交互に見つめた。

そして、うつむいたままの智沙ちゃんの頭に、そっと手を置く。

「智沙ちゃん、寂しかったのね？」

「……………」

こく、と智沙ちゃんは小さく肯いた。

「智沙ちゃん……………あの家で、独りぼっちだものね」

「……………美保、さん……………」

目に涙をためて、智沙ちゃんが、美保さんの顔を見上げる。

「じゃあ……………三人でしましょうよ」

「なっ……………！」

僕は、美保さんの言葉に、思わず声をあげていた。

けど、智沙ちゃんは、あまり驚いた顔をせず、ただ、ぼんやりと、美保さんの顔を見つめている。

「いいの……………？」

「ええ……………」

ぽ一つと頬を染めている智沙ちゃんの間いに、美保さんが肯く。

「なっ、なっ、なっ、なっ……」

さ、三人でって、それって、つまり……。

ネットでエッチな話をした時に、話題に出ることもあったけど、でも、それって……。

「うふ……研ちゃん、そういうことに決まったから」

「き、決まったからって……」

美保さんの言葉に、僕は、きちんと返事をできない。

「あら……研ちゃんにとっては、夢のような話じゃない？ あたしたち二人が、研ちゃんを気持ち良くしてあげるのよ？」

「で、でもっ……そ、そんなのおかしいよ……！」

「そうね……おかしいかもしれないわ……」

そう言いながら、美保さんは、自分のブラウスのボタンに指をかけた。

「あたし、もともとおかしいのよ……お姉さんの子供に、手を出しちゃうような女だもの……」

美保さんの瞳が濡れたように光り、目許が、ほんのりと染まっている。

それが、美保さんの“したくなった時”の顔だということを、僕は、すでに知っていた。

「み、美保さん……」

「情けない声を出さないの。男の子はね、こういう時、両方の女を満足させなくちゃいけないのよ……」

ブラウスとスカートを脱ぎ、美保さんが下着姿になる。

大きな乳房を包む、レースをあしらった白いブラと、同じデザインのショーツ。

その中に、僕の牡の部分刺激してやまない、あまりにも魅惑的な女の人の器官がある。

「研ちゃん……」

少しかすれた声で言いながら、美保さんが、僕に抱きついてきた。

シーツの白と、下着の白と、肌の白が、僕の視界を埋め尽くす。

美保さんに、飲み込まれる——

ほんのかすかな恐怖と、罪悪感が、快樂への期待に押し流されていく。

「智沙ちゃんにした後だから、次はあたしの番よ」

胸の谷間に僕の顔を押し付け、すんすんと僕の髪の毛の匂いを嗅ぎながら、美保さんが言う。

その柔らかくすべすべな太腿が、僕の股間のものをこすっている。

「智沙ちゃんも……それでいいでしょう？」

そう言われて、こくりと智沙ちゃんが肯くのが、視界の端に映る。

美保さんの手で……いや、全身で体を撫で回され、僕は、溺れる人のように、はあはあと喘ぐだけだ。

いつしか、美保さんのブラが外れ、そして、剥き出しになった乳首が、僕の顔をくすぐる。

「ああ……美保、さんっ……」

いつしか僕は、美保さんの体を抱き締めていた。

智沙ちゃんが、僕と美保さんの方を、じっと見つめている。

でも、その顔がどんな表情を浮かべているのか、僕にはよく分からない。

「うふふ……研ちゃん、お尻、舐めてあげるわね……」

「えっ……わっ！」

僕は、美保さんにベッドに優しく押し倒された。

美保さんが、するりと僕の体から離れ、そして、僕の股間に顔をうずめる。

「み、美保さん、ちょっと……んんっ」

足を持ち上げられ、オシメを替えられる赤ん坊の格好になってしまう、僕。

お尻の割れ目に、美保さんの息を感じる。

「研ちゃんのお尻の穴、ひくひくしてるわ……」

美保さんは、そう言ってから、僕のその部分にキスをした。

「ひゃっ……！」

僕が悲鳴をあげるのにも構わず——いや、もっと声を出させようともするように、美保さんの舌が、僕のアナルをくすぐる。

これまで愛撫されたことのない場所を舐め回され、僕は、未知の快感に情けなく喘いだ。

「研児君……気持ちいいの……？」

気が付くと、智沙ちゃんが、僕の顔をのぞき込んでいた。

成す術も無く美保さんの愛撫を受け入れて閉まっている自分が恥ずかしくて、僕は、そっぽを向いてしまう。

「気持ちいいのよね、研ちゃん……。オチンチン、びきびきにしてるもの……」

美保さんの指摘どおり、僕のペニスは、すでに勃起しきっていた。

「ふふ、こんなにヌルヌル漏らしちゃって……可愛いわ……」

美保さんの指先が、僕の亀頭を撫で回す。

かつてないほどに先端から溢れている液が、美保さんのきれいな指を濡らしている。

「んふっ……じゃあ、入れるわね……」

美保さんの言葉に、僕と、智沙ちゃんの体が、びくっ、と震える。

けど、美保さんは、すでにペニスを勃起させて要る僕の腰に、大胆にまたがって来た。

「ん……」

ちろっ……と美保さんの舌が、唇を舐める。

そして、もうじつりと濡れているアソコを、ペニスにぴったりと押し付けた。

熱く息づいている、柔らかな肉のぬかるみ。

そこが、僕の勃起したペニスを、徐々に飲み込んでいく。

「ああんっ……あふう……」

僕のを根元まで挿入し、美保さんは、満足げな溜め息をついた。

そして、潤んだ瞳を、智沙ちゃんに向ける。

「智沙ちゃんも、してもらったら？」

「え……？」

「研ちゃんに、アソコやお尻を舐めてもらったら？ ってことよ。好きでしょ？ してもらうの……」

「そ……そんなこと……」

智沙ちゃんが、耳まで顔を赤くする。

「いいよ、智沙ちゃん……来て……」

僕は、智沙ちゃんに言った。

頭は熱に浮かされたようになっていて、もう、まともな判断ができてる状態じゃない。

ただ、とにかく、僕は、美保さんと智沙ちゃんの体を、いっしょに味わいたかったのだ。

「で、でも……でも……」

さすがに、智沙ちゃんが逡巡する。

「ん、もう……迷ってると、いつまでも、研ちゃんはあたしが独り占めよ……」

そう言いながら、美保さんが、僕の腰に腰をこすりつけるように、ヒップをうごめかせた。

「んっ……んあああっ……あううっ……」

湧き起こる快感に、僕は、声をあげてしまう。

「……………」

智沙ちゃんが、ちょっと怒ったような顔で、僕の顔をまたいできた。

「ああ……智沙ちゃん……」

「け、研児君……舐めて……」

そう言って、智沙ちゃんが、まだ濡れたままのアソコを、僕の口に押し付ける。

「うん……」

僕は、ためらうことなく、さっき自分が精液を注ぎ込んだばかりのクレヴァスに舌を差し込んだ。

「あ、あうっ……うん……あふうっ……」

舌を動かすと、智沙ちゃんが、抑えられた喘ぎを漏らす。

目の前に美保さんがいるのが、恥ずかしいのだろう。まるで、声を嚙み殺しているような感じた。

「智沙ちゃん……今まで仲間外れにして、ごめんね……」

美保さんが、ゆるゆると腰を使いながら、智沙ちゃんの細い肩に手を置く。

「そ、そんな……私は……んむっ」

何か言いかける智沙ちゃんの唇を、美保さんの濡れた唇が、塞いだ。

「んっ、んむっ、んんん……ああ、美保さん……」

「いい子ね、智沙ちゃん……ちゅっ、ちゅむっ……んちゅ……うん……んふう……」

美保さんが、智沙ちゃんの唇をついばみ、首筋に舌を這わせ、そして、舌に舌を絡ませる。

もしかしたら、美保さんと智沙ちゃんがキスをするのは——これが初めてじゃないかもしれない

ふと、そんな思いに駆られた僕は、奇妙な衝動の赴くまま、腰を突き上げ、智沙ちゃんのアソコを吸い立てた。

「んふっ、あん、ああんっ……！ け、研ちゃんてば……あはあんっ……！」

「ああっ、やつ、やああん……け、研児君っ……あうっ、あはあっ……！」

二人の喘ぎ声を聞きながら、目の前のピンク色の秘唇を舐めしゃぶり、肉棒で膣内をこすり上げる。

智沙ちゃんの秘唇から溢れ出る生臭い液を、僕は、肉襞ごと夢中で啜った。

智沙ちゃんの匂いとともに、つんとした僕自身の精液の匂いが鼻を突き、それが、異様なほどに僕を興奮させる。

「ああんっ、あ、あうっ、うん、あはあっ……う、うそっ……！ こんなの……あん、あああんっ……！」

智沙ちゃんが、美保さんの柔らかな体に取りすがるようにして、快楽に身を震わせる。

「はあ、はあ、はあ……うふふっ……研ちゃんにアソコを舐めてもらって感じてるのね……」

「あん、あんあんっ……イヤあ……は、恥ずかしい……言わないでえ……」

「いいのよ……もっともっと感じて……その方が、研ちゃんも嬉しいはずよ……」

そう言いながら、美保さんが、愛しそうに智沙ちゃんの頬を撫で、額や脛にキスをしている。

「あたしも、研ちゃんのを中に入れて、とっても感じてるの……あん、あふうんっ……智沙ちゃんも、そうだったんでしょう？」

「あくっ、うふん、んふうっ……そ、それは……あああっ……！」

「うふふ……可愛い乳首をこんなにポツキさせちゃって……いけないコね……」

そう言いながら、美保さんが、その豊かな乳房を、智沙ちゃんの胸に押し付けてる。

「あうっ！ あんっ、あああんっ……そ、それ、だめえっ……あうう……あああんっ……！」

ここからだとはよく見えないけど、どうやら、二人は乳首と乳首を触れ合わせ、刺激しあっているらしい。

智沙ちゃんの愛液が僕の口元をさらに濡らし、美保さんの愛液が僕のピストンをさらに滑らかなものにする。

「ああっ、あく……うんっ、ううんっ……研ちゃんの、また大きくなったわ……あはあっ……！」

智沙ちゃんと抱き合い、体をいやらしくクネらせながら、美保さんが言う。

「はあ、はあ、はあ……あたしと智沙ちゃんが仲良くするところを見て、興奮しちゃったのね……あん、あああん、あん、あうん……はふうっ……！」

肯く代わりに、僕は、腰の動きをさらに速くした。

「あっあっあっあっあっあっ……！ す、すごいっ……！ あああん、あうん、あん……あくううっ……！」

美保さんが、声を高くして、自分でも腰の動きを激しくする。

とろけそうなほどに柔らかな美保さんのアソコが、ぎゅむっ、ぎゅむっ、と優しく僕の肉棒を抜き上げる。

「んぶっ、ぷはっ……あああ……み、美保さんっ……！ そ、そんなにされたら……！」

「研ちゃんの、イキそうなの……？ だ、だったら……あううっ！ ち、智沙ちゃんも、イかせてあげなきゃダメよ……あああん……！」

「うんっ……！」

僕は、智沙ちゃんの丸いお尻を両手で固定して、クリトリスの辺りを激しく舐め回した。

「あひいいいいい！ あああ、ダメ、ダメええ！ そ、そこ、舐めちゃ……ああああああんっ！」

「ダメじゃないでしょ、智沙ちゃん……気持ち良かったら、もっとしてって言うのよ……！」

そう言いながら、美保さんが、智沙ちゃんのオツパイをむにむにと捏ね回す。

「んはああっ！ あん、あんあんあんあんあんあんっ！ そ、そんなっ！ あひっ！ つひいいいいんっ！」

「ほら、こんなに乳首が固くなって……コリコリしてるわ……」

「あああああ、すっ、すごい……ああああんっ！ あっ！ んはあああ……もう、もう私……あううううっ！」

「ほら、素直になりなさい……はあ、はあ、はあ……研ちゃんにお願いするのよ……」

「んあああっ！ お、お願いっ……！ 研児君っ！ も、もっ……もっとしてえ……ああああ、は、恥ずかしい……恥ずかしすぎるう……っ！」

恥ずかしさと気持ちよさに身悶えする智沙ちゃんのクリトリスを舌で弾き、その周辺ごとにはむはむと甘噛みする。

「やっ、やあああっ！ ダ、ダメっ……！ あああああ！」

ぶしゃっ！ と愛液がしぶきになって溢れ、僕の顔を濡らす。

僕は、ますます興奮して、智沙ちゃんのクリトリスからお尻の穴まで、まんべんなく舌を這わせ、こすりつけた。

「そ、そんなっ……あああっ！ お、お尻なんて舐めちゃイヤああああんっ！ あうっ！ あひっ！ ひいいいいい！」

「はあ、はあ……智沙ちゃん、イって……研ちゃんやあたしも、一緒にイクから……！」

美保さんが、智沙ちゃんの耳たぶをしゃぶりながら、甘く濡れた声でささやく。

「んひっ！ あひいいいいんっ！ イ、イク……イっちゃうううううう！」

びくんっ！ と智沙ちゃんの体が、僕の顔の上で痙攣した。

僕は、最後のトドメとばかりにクリトリスの皮を剥き、そこを強く吸引した。

「ああああああ！ イク、イク、イク、イク、イクうううううううう！」

「ああんっ、ああんっ……！ あ、あたしも……イっちゃううっ……！」

美保さんのお尻が激しく上下に動き、アソコが、僕の肉竿をきつく搾り上げる。

「っ……！」

僕は、たまらず美保さんの中に射精してしまった。

「あっ、ああああああんっ！ な、中に、出てるう……ああああああんっ！」

びゆくびゆく律動しながら射精を続けるペニスを膣肉で締め付けながら、美保さんが、背中を反らせるようにして絶頂に達する。

僕は、美保さんの声を聞きながら、その体内に射精を続けた。

「あああっ……あっ、あああ……あうん……あああああ……」

うっとりしたような誰かの溜め息が、聞こえた。

そして、甘ったるいような独特の性の匂いが、僕を包んでいる。

僕の脳みそは、もはや何も考えることができず、ただとてつもない気持ち良さに、じんじんと熱く疼いているようだった。

「ちゅむ、ちゅむっ、ちゅぶ、んちゅっ……さあ、智沙ちゃん、やってみて……」

「うん……ちゅ、ちゅ、ちゅっ……んちゅっ……んっ……ちゅむっ……」

「上手よ、智沙ちゃん……次は、舌を出して、研ちゃんの良いところを舐めてあげて……」

「れる、れるる、んちゅ、ちゅむっ……こう……？」

「そう、そこの、先っぽのところよ……それから、ここの、くびれてるところも、男の子は気持ちいいの……ちゅむ、ちゅむむ、れる……ちゅば、ちゅぶっ……」

美保さんと智沙ちゃんが、顔を並べて、僕のペニスをフェラチオしている。

二人の唇が、僕の亀頭をついばみ、二人の舌が、僕の肉竿の裏筋を舐めあげている。

さっきまで、精液と、美保さんの愛液にまみれていた僕のペニスは、今や二人の唾液によって、ぬらぬらと濡れ光っていた。

「ああ……研児君の、また大きくなって……」

どこか、ぼおとした口ぶりで、智沙ちゃんが言う。

「本当に、研ちゃんてば元気ね……うふふっ、二人で、研ちゃんを天国に連れてってあげましょう」

「うん……」

そう返事をして、智沙ちゃんが、ぺちゃぺちゃと舌を使って僕のペニスを上から下まで舐めしやぶった。

「あっ、あああっ、あく……うんっ、うっく……あふうっ……」

僕にできることと言えば、絶え間無く送り込まれる快感に声を上げ続けるくらいだ。

「うふ、研ちゃんの、可愛い……」

美保さんが、智沙ちゃんが舐めているところよりもさらに下——陰囊を舌で舐め転がしながら、言う。

「アソコの中に入ってる時はあんなに遅しくて男らしいのに、こうやってあげると、ぴくぴく震えて……本当に可愛いわ」

そう言いながら、美保さんが、僕のシャフトの根元辺りをしこしこ扱く。

「あ、あうっ、くうっ……！」

「うふっ、いい声……智沙ちゃんも、そう思うでしょ……？」

「うん……研児君、とっても可愛い……」

智沙ちゃんも、そんなことを言いながら、さっきから先走りの汁を溢れさせている亀頭を指先で撫で回す。

ひりひりするような快感がペニスから湧き起こり、電流みたいに僕の体をびくびくと痙攣させる。

「あ、あうっ、くっ、んく……はあうっ……」

「ああ、あたし、がまんできないわ……」

美保さんが、そのぼってりとした唇を開き、僕のペニスを口に含んだ。

「んむっ、あむむ、んぐ、んふっ……ちゅぶ、ちゅぶぶ、んちゅっ、ちゅぶぶぶぶ……」

「うっ、うううっ……んっ、んっ、んっ……あう……ああっ……」

美保さんの濡れた唇が肉幹の上をスライドし、たまらない快感を紡ぎ出す。

「ちゅむ、ちゅぶぶ、んふうん、ぷは……智沙ちゃんも、してみる？」

「うん……」

智沙ちゃんが、その小さな唇を開き、僕の亀頭にかぶせてくる。

「んむ、んぐぐ、んぶ……んふう……」

「歯を立てちゃ駄目よ……唇で、オチンチンを扱くようにして……」

「んむ、んむむっ、ちゅぶ……ちゅぶ、ちゅぶ、んちゅっ、んぶぶ、ちゅぶっ……」

智沙ちゃんのぎこちない口唇愛撫が、僕の欲望をさらに高ぶらせる。

「うふっ……智沙ちゃんのお口で、研ちゃん、とっても感じてみたいよ……」

そう言いながら、美保さんは、僕の陰嚢を優しく揉み、さらには、指先をお尻の割れ目にまで潜らせてきた。

「あ、あうっ、あく、あああ……そ、それ、だめえ……」

「ふふ……ここが、ぴくぴくしてるわ……」

美保さんが、陰嚢とお尻の穴の間を、指先で愛撫する。

「もう、出しちゃいそうなのね……智沙ちゃん、代わろうか？」

「んっ、んむっ、んんんっ……」

智沙ちゃんが、僕のペニスを口に含んだまま、首を左右に振る。

「もう、しょうがないわね……でも、お口に出してもらったら、きちんと飲まないとだめよ？」

こく、と今度は肯く智沙ちゃん。

「ふふ……覚悟はできてるのね……。研ちゃん、思い切り出しちゃっていいみたいよ？」

そう言って、美保さんは、智沙ちゃんが啜え切れてない、肉棒の下三分の一くらいを、指先で扱き始めた。

智沙ちゃんも、ちゅばちゅばと音をたてながら、僕のペニスをしゃぶりしている。

「ああ、そんな……だめだよ……ああん……ホ、ホントに出しちゃう……！」

「んぐ、んぶぶ、んちゅ、ちゅぶぶっ……いいよ、研児君……出して……飲んであげる……ちゅむ、ちゅぶぶっ……！」

智沙ちゃんが、まるで熱に浮かされているような口調で言って、再び僕のモノを啜える。

智沙ちゃんの口と美保さんの指で刺激し続けられ、僕は、とうとう限界を向かえてしまった。

「あああ、あ、あ、あーっ……で、出る……あああっ！」

「んんんんんんっ？」

びゅびゅーっ、びゅびゅーっ……！ と、激しい勢いで、智沙ちゃんの口の中に、射精してしまう。

「んぐ、んぐぐ、んむっ……んふうっ、んぐ……ん……んくっ、んくっ、んくっ、んくっ……」

智沙ちゃんが、苦しそうに眉を寄せながら、僕の出した精液を、飲み干している。

それを、僕は、茫然と見つめていた。

「あん、ダメ……あたしにも、少しちょうだい……」

「ぷはっ……み、美保さん……んむっ……！」

僕の精液で濡れた智沙ちゃんの唇を、美保さんが、奪う。

そして、美保さんは、智沙ちゃんの舌に舌をからませ、さらには、ちゅうちゅうと吸い上げた。

「あむっ、ちゅむ、んちゅっ……はあ、はあ、はあ……んふふ……研ちゃんの精液の味がする……♪」

「ああ、美保さん……ちゅ、ちゅむっ、ちゅっ……んふうん……」

甘えたような声をあげて、美保さんのキスに応える、智沙ちゃん。

僕は、そんな二人の様子を、ぼおっと見つめていた。

これは——こんなことは——まるで——夢だ——

ふと、なぜか、僕はそんなことを思った。

翌日の、朝。

枕元に、コンビニの小さな袋と、メモ帳ががあった。

“智沙ちゃんとのデートの時に使ってね”

メモ帳には、美保さんの字で、そんなことが書いてある。

袋の中には、真新しいコンドームの箱が入っていた。

第七章
—夏の花—

表向きは、平穏な日々が続いていた。

ごく普通の毎日だ。

僕も、美保さんも、智沙ちゃんも、互いを求めることなく、ただ一日を過ごす。

コンビニの袋に入ったコンドームは、未開封のままだ。

ある夜、僕は、精一杯の勇気を振り絞って、美保さんに訊いてみた。

「あのコンドームは……その……どういう意味なの？」

「どうって……やだ研ちゃん、あれが何だか知らないの？」

美保さんが、穏やかな笑みを浮かべたままの顔で、聞き返す。

「ち、違うよ……。ただ、その……どうして美保さんが、って思って……」

「だって、研ちゃんじゃ、アレ、お店で買えないでしょう？」

「だから、そういう意味じゃなくて……！」

はぐらかされているような気持ちになって、僕は、つい大声を出してしまった。

「そうじゃなくて……だから……なんで、美保さんは……自分の時には、僕に付けろって言わなかったの？」

その時、美保さんは、一瞬——ほんの一瞬だけど——すごく、寂しそうな顔になった。

けど、すぐに、いつもの穏やかな顔に戻って、僕に言う。

「智沙ちゃんが、あの年で妊娠しちゃったら、困るでしょう？」

もっともだけど、やっぱり、どうもわざと的を外したような答え。

でも、僕は、それ以上追及できなかった。

さっきのような美保さんの寂しい顔を、見る勇気が無かったのだ。

「ごめんなさい……」

僕は、美保さんに聞こえないように、こっそり謝った。

夏祭りの夜、僕は、浴衣に着替えた。

美保さんのお父さん——つまり、僕にとってはお爺さんの浴衣だ。

ちょっとくたつとなってるけど、どこも擦り切れたり破れたりしていない。美保さんが、ちゃんと保存していたからだろう。

サイズも、僕にぴったりだった。お爺さんは小柄な人だったのだ。

「あ、よく似合ってるね」

僕の浴衣姿を見て、美保さんが、にこにこしながら言う。

美保さんは、紺色の地に朝顔をあしらった浴衣を着ていた。

「えっと……美保さんも、すごく似合ってる」

「んふっ、ありがと♪」

屈託なく、美保さんが微笑む。

それは、とても邪気のない笑顔だった。

「……………」

なぜか僕は、その美保さんの表情に、寂しいような、悔しいような、そんな気持ちを抱いてしまった。

いや、“なぜか”なんかじゃない。僕には、理由が分かってる。

美保さんが、まるで、僕とああなる前に戻ってしまったように思えたからだ。

やっぱり、僕は、取り返しのつかないことをしてしまったんだ、と、思う。

美保さんと、智沙ちゃん——二人を好きになって——二人とも抱いてしまうなんて——

ならばどうすれば良かったのかは、よく分からないけど……今は、確実に、何かが壊れてしまっている。

「研ちゃん？」

美保さんが、心配そうに僕の顔を覗き込む。

「どうか、した？」

「ううん……なんでもないよ」

「そう……。じゃあ、早く広場に行きましょう。智沙ちゃん、もう着いちゃってるかもしれないし」

「そうだね……………」

美保さんと、智沙ちゃんと、僕の三人で、夏祭りに行く。

智沙ちゃんは、そのことを、まるで小さい子供みたいに楽しみにしていたっけ。

「行こう、美保さん」

口に出してそう言って、僕は、これまたお爺さんのお下がりの下駄を履いた。

夏祭りの会場に着いた時、美保さんの携帯が鳴った。

「もしもし、智沙ちゃん……？ 今、どこ？」

僕は、電話に出た美保さんの横顔を、ぼんやりと見つめた。

と、微笑んでいた美保さんの顔が、かすかに強ばる。

「そう……そうなの……仕方ないわね……………」

ささやくような美保さんの声が、固い。

「ええ、そうね……。うん、分かってる……うん……うん……………」

美保さんの声を聞いているうちに、僕は、もしかして電話の向こうで智沙ちゃんが泣いているんじゃないかと思った。

それは、全く何の根拠も無いことではあったんだけど——

「うん……じゃあ、切るわね……」

美保さんが、電話を切った。

「智沙ちゃん、来れないって」

ぽつん、と美保さんが言った。

「模試の結果が悪かったから、家を出してもらえないって言ってたわ」

「……厳しいんだね、智沙ちゃんの家」

「あれは、厳しいのと違うわ」

美保さんが、いつになく険しい顔で、言った。

「自分の思いどおりにいかないのが嫌なだけよ」

「美保さん……」

美保さんは、僕の方を見ようとしなない。

「智沙ちゃん……あの家に居続けると……いつか、死んでしまうわ」

「えっ……」

美保さんの物言いに、僕は、思わず声をあげてしまっていた。

「智沙ちゃんが写真を撮るのが好きなのは、知ってるでしょう？」

出店の明かりを見るときはなしに見ながら、美保さんが、言う。

「うん……」

「あの子ね、カメラマンになりたがっていたの。それで、そういう専門学校に行きたいって言ったのよ。そしたら……」

きゅっ、と美保さんが、その白いこぶしを握り締める。

「姉さんは——智沙ちゃんの顔を、思い切り叩いたの」

「え……？」

僕は、自分にとって伯母にあたる智沙ちゃんのお母さんの顔を思い浮かべながら、絶句した。

あの、いつも物静かで上品な伯母さんが……智沙ちゃんを……？

「全寮生の女子校から、名門の短大に行かせる……智沙ちゃんの両親は、そういうふうを決めたのよ」

美保さんが、無表情な顔で、言葉を続けた。

「それで、その時、智沙ちゃんは、メガネを壊されちゃってね……それ以来、ずっとコンタクトにしているの」

「……………」

「でも、智沙ちゃんは、あの時に壊れたメガネを、今も持っているはずよ」

知っている……。

智沙ちゃんの部屋にあった、あの、フレームの歪んだメガネ。あれが、そうだ。

伯母さんが——メガネがあんなふうになるほど強く、智沙ちゃんの顔を叩いた——

ただ、専門学校に行きたいと言っただけで。

「ね、研ちゃん」

美保さんが、僕の方を向いた。

「な——何？」

「智沙ちゃんを、助けてあげて」

切羽詰ったような口調で、美保さんが言う。

「そ、それは……もちろん、僕にできることなら……」

そう言いながら、僕は、美保さんの瞳に浮かんだ色に、ひどく悪い予感を覚えていた。

そして、その予感は、次の瞬間に、現実となる。

「だったら、研ちゃん……あたしと、別れて」

それは——予想通りの言葉だった。

「どう——して——？」

「智沙ちゃんには……もう、研ちゃんしかいないのよ」

美保さんが、静かな声で、言う。

ともすれば、すぐそこで繰り広げられている祭りの喧噪によって、かき消されそうな声。

「あたしと研ちゃんと一緒にじゃ、やっぱり駄目なのよ……。智沙ちゃんのことだけを想ってる研ちゃんでは……そうじゃなきゃ、智沙ちゃんを、救うことはできないわ」

美保さんが、決め付けるように言う。

それは——それは、そうかもしれないけど——でも——そんな——

「そんな……そんなの……そんなの、勝手すぎるよっ！」

僕は、想わず叫んでいる。

「さ、三人でって……そう言ったのは美保さんじゃないか！ それを、どうして今になって……」

「あたしが、間違ってたわ……」

美保さんが、長い睫毛を伏せ、うつむく。

「あの場を収めるには、ああするのが一番だと思ったのよ。でも……そんなわけなかった。あたし、あの時、どうにかしてたんだわ」

「そんな……」

そんな言葉は——聞きたくなかった。

もし、仮に、それが本当のことだとしても。

「軽蔑して……。あたしは、こういう女なのよ……。あたしなんかを好きなままでいないで……智沙ちゃんだけの研ちゃんになってあげて……」

「……………」

肩が、震える。

目の前が、赤く染まっているようだ。

僕は、生まれて初めて抱くような感情を、目の前のこの人に抱いていた。

「……………」

無言で、美保さんの手を、強くつかむ。

「研ちゃん……？」

そのまま、僕は、夏祭りの会場の奥にある神社を目指して、歩きだした。

「ちょ、ちょっと、研ちゃん……！」

浴衣姿の人々の波をかき分け、出店の出す騒々しい音を聞きながら、広場を突っ切った。

僕に手を引かれ、前かがみになって歩く美保さんを、何人かの人が振り返り、そして、すぐにその人たちは祭りの賑わいの中に帰っていく。

僕は、体に響く和太鼓の音を背中で聞きながら、丘の上の神社に至る石段を昇っていった。

「ねえ、研ちゃん……ちょっと待って……」

美保さんの言葉に構わず、強引に手を引き、石段を昇り続ける。

そして、僕たちは、神社の境内に出た。

誰も、いない。

広場の明かりはここにまでは十分に届かず、お社は、闇の中にうずくまるシルエットにしか見えなかった。

「研ちゃん……その……怒るのも無理はないけど、でも、きちんとあたしのお話を……」

「いやだ」

僕は、聞き分けの無い子供のようにそう言い、神社の敷地の中にある雑木林に、美保さんを引っ張り込んだ。

「け、研ちゃん……」

驚いた表情の美保さんの背中を、ケヤキの幹に押し付けるようにする。

そして、僕は、無理やりに、美保さんの唇に、唇を重ねた。

「んっ！ んぐ……う……うん……んんっ……！」

抱きすくめた僕の腕の中で、美保さんが、くぐもった声をあげながら身をよじる。

構わず、僕は、美保さんの唇を吸い、口の中に舌を差し入れた。

噛み合わさったままの歯を舌でなぞり、そして、息苦しくなって、唇を離す。

「はあ、はあ、はあ……研ちゃん……」

ぼおっと頬を染めながら、美保さんが、潤んだ瞳で僕を見る。

「ねえ……もう、ダメよ……だから……お願い……」

「いやだ」

僕は、再び言った。

「そんな……研ちゃんは、智沙ちゃんのことを好きじゃないの？」

「それは……」

「ねえ……智沙ちゃんを悲しませるようなことは、やめて……」

「卑怯だよっ！ そんなこと言うのは……！」

「……………」

美保さんが、悲しげにうつむく。

「でも、智沙ちゃんは……」

「そうじゃなくてっ……！ だったら——美保さんはどうなんだよっ！」

僕は、思わず、そう叫んでいた。

「あたし……？」

「美保さんは——僕のこと、好きじゃないの？」

とうとう——

とうとうこの問いを、口にしてしまった。

今まで、このことを確かめるのを、半ば意識的に避けていた。

だって、美保さんは、一度も、僕のことを好きだと言ってくれてなくて——

「あたし……」

美保さんの声が、かすかに震えている。

「あたし……寂しかったのよ……。だから、研ちゃんを誘ったりしたの……」

「美保、さん……」

嘘だ、と言いたいけど、言えない。

美保さんの本心がどうあれ、今、このタイミングでそう言われたら、それは、本当と同じことだ。

「あたしは……自分の欲望に負けて、研ちゃんを誘ったの……利用したのよ……。何とでも言っ
……それで気が済むなら、好きなだけ殴って……」

「……………」

僕は、美保さんの浴衣の襟に、手をかけた。

そのまま、乱暴な手つきで、いきなり前をはだけさせる。

「キャッ……！」

自らの胸を隠そうとする美保さんの手を遮り、僕は、目の前の白い乳房を鷲掴みにした。

「い、痛いっ……！ 痛いわ、研ちゃん……！」

苦痛に身をよじる美保さんの胸を、揉みしだき、こね回す。

僕の手の中で、大きな乳房が、柔らかく形を変えた。

「い、いや……いやっ……だめ……だめよ、研ちゃん……んんっ……」

美保さんの乳房に指を食い込ませながら、噛み付くようにキスをする。

そのまま、首筋から鎖骨へと唇を這わせ、乳首を口に含み、舐め回した。

僕の口の中で、乳首が固く勃起する。

「だめ……だめなの……！ 研ちゃん……あ、あたし……！」

「寂しかったからでもいい……利用しただけでもいいよ……！ 美保さんは、僕の女なんだろうっ
……！」

そう言って、美保さんの乳房を強く吸い、キスマークを付ける。

そして僕は、美保さんの右の乳首を吸い上げながら、右手を浴衣の裾に差し込んだ。

「あうっ……！」

ショーツの上からアソコを強く押すと、美保さんの体が、びくと震えた。

「ほら……濡れてるじゃないか……」

そう言って、湿ったショーツの布地をぐいぐいと柔らかな部分に押し付ける。

「ああ、だめ……だめえ……あ、はっ……あ……んんんんっ……」

美保さんが、首を左右に振りながら、声が漏れるのを必死にこらえている。

僕は、ショーツの中に手を潜り込ませ、美保さんのそこに直接触った。

「ああっ……ダメえ……！」

熱いぬめりが、僕の指に絡み付く。

僕は、美保さんの秘唇を指でまさぐり、膣口に指先を挿入した。

「あっ、そ、そんなっ……！ そんなこと、ダメよ……ううんっ……！」

「今さらそんなっ……！」

怒りに似た激情に駆られ、人差し指と中指を膣内に差し入れ、親指でクリトリスの位置を探る。

「うっ、うあっ、あああっ……お、お願い、研ちゃん……待って……あ、う、う……アアンツ！」

美保さんの声が高く跳ね上がり、僕は、自分がクリトリスに触れたのだということを知った。

そのまま、膣内の指を動かしながら、親指でクリトリスを揉み潰す。

「うっ、うああっ、うく、あああんっ……そ、そんな……ああっ……こんな所で……あああんっ！」

「はあ、はあ、はあ……すごい……すごいよ……すごく濡れてるよ、美保さん……」

「や、めて……お願いよ……あん、あああんっ……そんなに激しくしちゃダメよお……あううっ！」

大きな胸をたぶたぶ揺らして身をくねらせる美保さんを、左腕で強く抱き締めながら、右手を動かし続ける。

「ああうっ、あっ、あああん……け、研ちゃん、ダメ……あう、あん、ああん……あああっ……」

いつしか、甘い喘ぎが、美保さんの濡れた唇から漏れだした。

美保さんのそこからは、あとからあとから蜜が溢れ、僕の手の平をぐっしょりと濡らしている。

僕は、すっかり勃起しきってる美保さんの乳首を交互に吸い上げ、甘く歯を立てた。

「あっ、ううんっ、んふうっ……や、やあんっ……噛んじゃだめっ……ああんっ……」

美保さんが、痛がるどころか、さらに甘たるく声をとろかせる。

「美保さん……美保さんっ……」

とっくにいきり立っているペニスを、美保さんの剥き出しになった太腿に押し付けるようにしながら、僕は、執拗に愛撫を続けた。

「あ、あう、うんっ……んく……あはあっ……ひいいいんっ……はひいいいいい……」

美保さんが、すすり泣きのような声を漏らす。

僕は、美保さんの液にまみれた右手を、ゆっくりと抜いた。

「ほら……こんなになってるんだよ……」

美保さんがどれくらい感じてしまったのかを示したくて、糸を引く粘液でぬめる指を見せつける。

「あ、あああ……イ、イヤっ……！」

美保さんが、僕の腕から逃れようと、身を翻そうとした。

けど、その足取りは危なっかしい。僕は、難無く美保さんを後ろから捕まえることができた。

そのまま、今度は美保さんのお腹を木の幹に押し付けるような格好になる。

「逃がさないからね、美保さん……」

美保さんの耳たぶに、荒くなった息を吹きかけるようにして、言う。

「ああん……ダ、ダメよ……お願い……いつもの研ちゃんに戻って……」

「僕をこんなふうにしたのは美保さんじゃないか！」

「ああああっ……」

僕の言葉に、美保さんが、目尻に涙を浮かべる。

そのことにすら、頭の中が煮えるような興奮を覚え、僕は、美保さんの胸を後ろから掴んだ。

そして、もう一度、白く豊かな乳房を思うさま揉みまくる。

「ううっ、ああん、ああん……あく、あん、ああん……！」

もう我慢することができなくなったのか、美保さんの唇からあからさまな快楽の声が漏れる。

僕は、十本の指を駆使して美保さんの胸を揉み、勃起しっぱなしの乳首を強く指で摘んだ。

「ひんっ、ひいいんっ、あひいいいっ……先っぽ、ダメっ……！ あん、ああああんっ……！」

もう、どうすることもできない、といった風情で、美保さんが木の幹に両手を付き、僕にされるがままになる。

僕は、しばらく胸の感触を味わってから、美保さんの浴衣の裾をまくり上げた。

「あああ……研ちゃん……」

肩越しに振り返り、涙で濡れた目で、美保さんが僕を見つめる。

「ショーツ、びちょびちょだよ……」

そう言って、僕は、美保さんの愛液をたっぷり吸ったショーツを下ろした。

丸く、大きなお尻が、剥き出しになる。

「もう、抵抗できないの？ 美保さん……」

僕は、後ろから美保さんのアソコに触れ、指でくちゅくちゅと掻き混ぜながら、言った。

新たな熱い蜜が、さらに僕の手を濡らす。

「いやっ……ひどいわ、研ちゃん……」

「後ろからしてあげる……好きでしょ、美保さん……」

「し、知らない……」

まるで、拗ねたような声で美保さんが言い、視線を逸らす。

「美保さん……」

僕は、さっきから臨戦態勢のままのペニスを剥き出しにして、美保さんのアソコに押し当てた。

くちゅ……と僕のペニスが、柔らかなクレヴァスに食い込む。

「これで……おしまいよ……」

美保さんが、僕から目を逸らしたまま、言った。

分かっている。

そんなことは、分かっている。抱いたからって、美保さんと僕の関係が元のままになるわけじゃない。

こんなふうになってしまったら、もう、おしまいにするしかないんだ。

だから——

「あああああああああああああああつ！」

僕は、一気に、美保さんの体を貫いた。

先端が、美保さんの一番奥まで到達する。

「あ、あああ……あ……ああああんっ……」

美保さんが、快感に、声をあげている。

美保さんの濡れた肉ひだが、僕のペニスに絡み付いてくる。

温かくて、柔らかい。

僕は、欲しくて欲しくてたまらなかったこの感触を、この夏、手に入れて——そして、失うんだ。

そう思いながら、僕は、抽送を始めた。

「あんっ、ああんっ、あん、ああん、あん、ああん、あん、あん、あんっ……！」

僕の腰の動きに合わせて、美保さんが声をあげる。

いやらしくて、可愛くて、甘い——気持ちよさそうにとろけた声。

美保さんが、僕のペニスがもたらす快感に、完全に身を任せてしまっている。

だと言うのに、僕は、奇妙な焦燥感と敗北感を感じながら、腰を動かし続けていた。

「あああつ、はっ、あく、あくうっ……あああ……あああんっ……！」

「美保さん……僕……気持ち、いいよっ……！」

美保さんの背中に取りすがりようになりながら、前に手を回し、乳房を揉み続ける。

「知らない……知らないんだから……ああんっ！ け、研ちゃんなんか、知らないっ……！ あん、ああん……！」

零れる言葉と、溢れる体液。

鮮烈な快感が僕の肉棒をますます固くし、膨張したそれが、美保さんの膣内をさらにえぐる。

「ああうっ、うくうん、あう……あんっ！ あああ……あふ……あああんっ……！」

「美保さん……あああつ……すごく、動いて……絡み付いて……くるっ……」

「そんな……い、言わないで……言わないでっ……！ うんっ、うううんっ、あつ、あああ……あくうっ……！」

悩ましい声をあげ続ける美保さんの乳房に、僕は、きつく指を食い込ませた。

そんな僕の振る舞いすら、美保さんの乳房は、優しく吸収してしまう。

「はあ、はあ、はあ……美保さんの、オッパイ……やわらかい……」

「やん、やあつ……ああ、あん、ああん……あく……ああつ……きゃうううっ……！」

「すごい……乳首摘まむと、アソコがきゅーってなる……やっぱり好きなんですよ、これ……」

「そんなこと、ないわっ……！ あうっ、ああん、あん、あくうん……はひいいいいいんっ……！」

なおも乳首を転がし、つんつんと引っ張ると、それに合わせるように、ますます膣肉が締まる。

そこは、とろけそうに柔らかいのに、ぐいぐい僕の肉棒を搾り上げた。

まるで射精をねだっているようなその動きに、僕は、何もかも忘れそうになる。

こっちを振り返って、美保さんは、言った。

「あたし……こんなことする研ちゃん……嫌いよ……」

その言葉に、どういうわけか僕は、爽快感にも似た何かを感じてしまった。

お社の縁側に、僕と美保さんは、並んで座った。

下の広場ではまだ夏祭りが続いているのだろうけど、ここには、喧噪しか届いてこない。

ただ、明かりで、夜の底がぼおっと白くなっていた。

「研ちゃん……」

美保さんが、こっちを見ているのかどうか、僕には分からない。

僕は、美保さんの方を向かず、ただ、前を見ていた。

「明日、帰りなさい……」

それは——予想通りの言葉だった。

だけど、僕は、涙をこらえるために、かなりの努力をしてしまった。

「……うん」

ようやく、そう、返事をする。

「……………」

美保さんの気配は、まだ隣にある。

それが、何だか、不思議だった。

「……ねえ、研ちゃん」

美保さんが、僕に呼びかける。

「何？」

僕が、美保さんに返事をする。

「あたしね……」

言いかけて、美保さんは、黙ってしまった。

しばらく、そのまま。

下の広場のお祭りは、もうすぐ終わりそうだ。

「あたし……ずっと不思議だったの」

「え？」

「どうして、夏の歌って、みんな寂しい歌ばかりなのかな、って」

「……………」

どう答えていいか分からず、僕は、黙ってしまう。

すると、美保さんは、静かな声で、僕の知らない歌を、何小節か歌った。

本当に寂しい、夏の歌だった。

言葉の並びが綺麗すぎて、きちんと意味を取れなかったけど——夢と、思い出は、つまり同じも

のなんだという、そういう歌だ。

きっと、そうなんだろう。

だから、つまり、思い出は夢と同じだ。

過ぎ去ったできごとは、心の中の思い出でしかなくなり、そしてそれは、夢のように虚ろで空しいものなんだ。

けど……どうして、神さまは、そんなふうにし世の中を作ったんだろう。

時間は流れ、何もかも変わっていき、けしてひとところにとどまっていない。

そんな当たり前のことが、悔しいくらいに寂しくて——

「でもね、研ちゃん」

美保さんの声が、僕の思いを、優しく遮る。

「夏の歌は、寂しいばかりじゃないの。ただ、寂しい歌ばかりが、心に残っちゃうだけなのよ」

「……………」

「だから……………」

美保さんが、そこで言葉を詰まらせる。

僕は、耐え切れなくなって、美保さんの方を向いた。

美保さんが、じっと、こっちを見ている。

ああ——

美保さんは、最初からずっと、こっちを見ていてくれてたんだ。

でも、美保さん——

どうして、美保さんは泣いてるの？

「だから——」

どん——！

美保さんの言葉を、花火の音が、かき消した。

今年の夏が、終わった。

家に帰って、僕は、できるだけ父さんや母さんと話をするようにした。

子供のころみたいには話せなかったし、他の人たちみたいに話せなかったと思うけど、それでも、どうにか会話をした。

してみれば、それは、何ということはないことだった。

思っていたほど恐くはなく、そして、感動的でもない。ごくありきたりの、平凡で他愛のないやり取り。

チャットでこのことを話題にすると、誰かが、日常ってそういうもんですよ、というようなことを発言

した。

そう言われて、ようやく、自分が、日常ってものをそんなに嫌っていなかったことを思い出した。

けど、別に、日常を取り戻したくて、両親との会話をしだしたわけではなかった。

目的があったのだ。

美保さんのことを、知りたかった。

いろいろと聞いて、そして、僕は、美保さんの離婚の原因を知った。

はっきり父さんや母さんが言った訳ではないが、話を総合すると——美保さんは、赤ちゃんの産めない体なのだということだった。

どうやら、美保さんの結婚相手の家では、そのことが離婚の理由として通用したらしい。

少し啞然とした後で、猛烈な怒りを覚えた。

それから——美保さんが、どうして僕とああいう関係をもって——どうして智沙ちゃんのことをあんなに考えていたのか、何となく、分かったような気になった。

そして、僕は、美保さんが、あの海の近くの町から引っ越したという話を聞いた。

美保さんとは、音信不通になった。

終章
—秋の歌—

木枯らしの吹く中、僕は、名前すら知らなかった山あいの町を歩いていた。
未だに、知ってる人に出くわす可能性のある地元を歩くよりも、知らない町を歩く方が、気楽でいられる。

風に、枯れ葉が舞っていた。

「……………」

教えられた住所を探して、何度か歩を止める。

どうやら、目的地は近いようだ。

「……あそこ、かな？」

新築らしき、こじんまりとした綺麗なアパート。

郵便受けの名前を確認して、深呼吸する。

時間は、指定どおり。二人とも家にはいるはずだ。

僕は、ドアの横のチャイムを鳴らした。

中で、人の動く気配がして、予想よりちょっとだけ早く、ドアが開いた。

「……！」

「こんにちは……………」

そう挨拶をして、それから、微笑んで見せる。

「久しぶりだね」

エプロン姿で、目を大きく見開いている美保さんに、僕は、言った。

「け、研ちゃん……………どうして……………」

美保さんが、唇を震わせながら、ようやく言った。

「——私が呼んだの」

美保さんの後ろから、懐かしい声が聞こえる。

まあ、懐かしいと言っても、3ヶ月くらいしか離れていなかったんだけど……………。

「智沙ちゃん……………」

「いいでしょ。だって、赤ちゃんのパパに会いたかったんだもの」

智沙ちゃんが、そろそろ目立ってきたお腹を撫でながら、姿を現す。

あの中に……………僕の赤ちゃんが、居るんだ。

すでに智沙ちゃんからの手紙で知らされていたので、そんなに驚いたりはない。

けど、やっぱり、じーん、と体がしびれるような感覚があった。

「美保さんだけで智沙ちゃんをかばうの、大変だったよね。その……………ありがとう」

僕の子供を宿した智沙ちゃんに対する愛しさと、そして、美保さんに対する感謝の気持ちで、胸

が、一杯になる。

最近まで知らされていなかったとは言え、今まで果たすべき義務を果たしていなかった自分が、ちょっと情けない。

もちろん、父親が僕だということは、美保さんも、智沙ちゃんも、周囲に隠し通している。

智沙ちゃんは、この夏、誰とも知らない男にレイプされ、妊娠した——そういうことになっているのだ。

どんなに、智沙ちゃんは辛い思いをしたらろう。

それを、美保さんが、今まで守ってくれた。

そのことを、智沙ちゃんが美保さんに内緒で出した手紙で知って、僕は、一晩中泣き続けた。

名付ける事すら出来ないような温かく濡れた感情で、胸がいっぱいになったのだ。

断ち切ろうとして断ち切れなかった想いは、一つ季節が過ぎる間に、いつのまにか変わっていて

そして、僕は、二人の前に、意外なほど穏やかな気持ちで立っていた。

変わることで——もしかしたら、そんなに悪くないことかもしれない。

「その……今すぐは無理だけど……僕、きちんと働いて、立派なお父さんになるから」

だから、僕は、そう言った。

「そ、そんな……研ちゃん、そんなこと……」

「よろしくね、研児くん。……頼りにしてるからね」

おろおろと声をあげる美保さんのすぐ後ろで、にっこりと、智沙ちゃんがほほ笑む。

「うん」

僕は、そんな智沙ちゃんに肯きかけてから、美保さんの方を向いた。

「僕だけ仲間外れなんて、やめてよ」

「研ちゃん……」

「これから、みんな一緒に、家族になろう……ね？」

僕の言葉に、美保さんが、目を見開く。

「……うん」

子供みたいにそう返事をしてから、美保さんは、ぼろぼろと涙をこぼして泣きじゃくった。

おしまい

あとがき

久しぶりにしみりした話を書きたいと思っていたらししみりし過ぎてしまった巽ですが皆様はいかがお過ごしでしょうか？

というわけで、冬も間近となったわけですが、『夏の歌』がようやく完結いたしました。

何と言いますか、今回も難産でありました。って言いますか、当初の予定とは全然違う展開になってしまったわけですが。

実は、最初の心積もりだと、美保さんと智沙ちゃんは性的な主従関係だったのです。

で、主人公の研児くんは二人の関係に巻き込まれるような感じで3Pに……みたいなことを考えていたのです。

でも、それだとどうにも展開が苦しくなって、途中から大転換を図ったのであります。

美保さんと智沙ちゃんの関係については、当初の構想の名残があつたりしますが……。

この二人がどこまで行ってたのかを想像するのも、ちょっと面白いかもしれません。……いや、そんなことないかな？

でまあ、一番気になるのは、これ、きちんとオカズに使えるかなー、ということだったりします。

お話に凝ったりしますと(凝ったつもりなんです、これでも)、エッチシーンの方であんまりはっちゃけられないため、どうしてもそういう危惧を抱いてしまうわけで。

平行して連載していた『裏ももえシリーズ』が、そういう意味でははっちゃけ過ぎだったため、余計に心配になってしまってます。

最初に美保さんのキャラを考えた時は、今の2割増くらいエロかったんですけどねー。ううう、力不足です。

それはともかくとしまして、実は、ラスト近くの展開は自分でお気に入りだったりします。

智沙ちゃんを妊娠させることは、話を書いた当初から決めてました。

で、みんなに仲良く家族になって貰おうと、そういうラストを目指していたのです。目指すラストに行き付くことが出来て、何はともあれめでたいと、登場人物たちと一緒に喜んでいるところであります。

あと、何と言っても、今回楽しかったのは田舎の描写でした。

田舎に住みたいわけではないんですが、それでも、「遠くにありて思う田舎」というのはいいもんだなあ、なんて思っております。

そして、こういうのんびりしたところを舞台にして、もっともっとのんびりしたお話を書くのもいいかなあ、とも思ったりしています。

まあ、それはそれとしまして、次に何を書くのかについては全く未定ではあるのですが。

というわけで、読者様におかれましては、どこか一つでも印象に残ったシーンがありましたら幸いです。

そして、またお目にかかれると嬉しいです。

ではでは。